

# 日本地質学会 *News*

Vol.7 No.4 April 2004





# 鉱物・古生物から 分析用標準試料まで

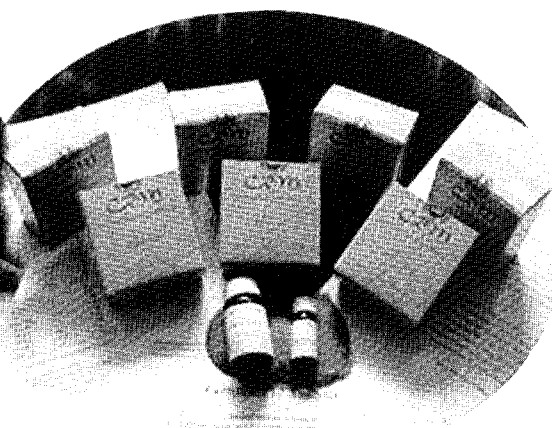
ゼネラルサイエンスは幅広くご要望にお応え出来ます。

地球化学標準試料 (GSJ) お取り扱いのお知らせ  
旧地質調査所の地球化学標準試料 (GSJ) 全種類を  
弊社で委託販売する事になりました。

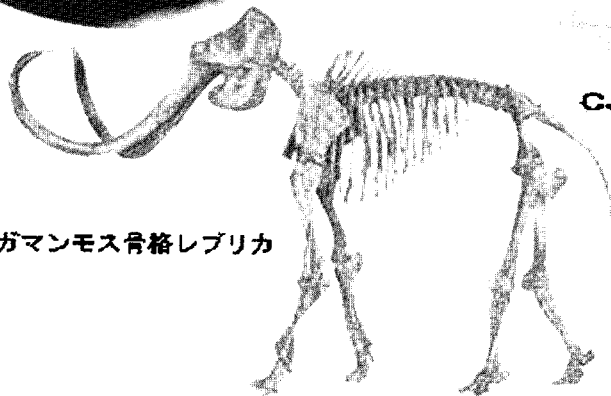
中国砂漠系標準試料(黄砂・黄土):販売のお知らせ  
世界初の黄砂・黄土の元素分析標準試料です。  
大気エアロゾル・堆積土壌中の組成分析に使用出来ます。



地球化学標準試料 (GSJ)



CJ-1,2 (2本組)



ケナガマンモス骨格レプリカ

- ☆ 弊社では、学校教育用・研究用及び博物館展示用の実物化石標本・模型、動物骨格標本・模型、恐竜骨格標本・模型、化石人類模型等世界中の標本・模型を取扱っております。  
アメリカ自然史博物館・大英自然史博物館・ケニア国立博物館・国立南オーストラリア博物館等を出しておりますオフィシャルの模型も取扱っております。ご興味ございましたら是非ご一報下さい。弊社よりご要望のカタログをご送付させていただきます。尚、納入実績としましては国立科学博物館を初めとして、全国の博物館・大学に納入させていただいております。
- ☆ 分析用標準試料については、上記標準試料の他に、NIST、CANMET、SABSC(MINTEK)、BCR 等の鉱物・鉱石標準試料をはじめ、いろいろな標準試料を多数取り揃えております。

お問い合わせ・資料ご請求は下記までお願い致します。

株式会社 ゼネラルサイエンス コーポレーション  
〒107-0052  
東京都港区赤坂 3-11-14 赤坂ベルゴビル 802  
TEL.03(3583)0731 FAX.03(3584)6247

e-mail:gsc@shibayama.co.jp <http://www.shibayama.co.jp>

## <<募金委員会からのお願い>>

学会法人化基金の募金状況（2004年3月31日現在）をご報告いたします。現在のところ、目標額2000万円に対し8,982,850円の醸金をいただいております。お名前を記して謝意を表します。今後とも会員の皆様からの一層のご協力をお願い申し上げます。

2004年4月5日

法人化準備委員会 募金委員会委員長 加藤碩一

### <募金方法>

募金額 1口 1万円（何口でも可）

銀行口座：みずほ銀行 神田駅前支店 普通預金 2058646

口座名：ニホンチシツガツカイボキンイインカイカトウヒロカズ

（日本地質学会募金委員会 加藤碩一）

郵便振替口座：00160-3-776921 日本地質学会募金委員会

### 醸金者（50音順）（2004年3月31日現在 醸金総額8,982,850円）

名誉会員（46）新井房夫 石井健一 市川浩一郎 市原 実 糸魚川淳二 岩崎正夫 氏家 宏 宇留野勝敏 大森昌衛 垣見俊弘 勝井義雄 加藤磐雄 唐木田芳文 勘米良亀齡 木崎甲子郎 黒田吉益 小島丈児 小高民夫 小林英夫 斎藤昌之 斎藤林次 下山俊夫 杉村 新 諏訪兼位 関根良弘 高柳洋吉 棚井敏雅 徳永重元 中川久夫 中沢圭二 奈須紀幸 橋本光男 羽田 忍 秀 敬 深田淳夫 藤井昭二 藤田和夫 藤田至則 古川和代 堀口萬吉 松本達郎 松本徂夫 水野篤行 都城秋穂 村田正文 八木健三 正会員（236）会田信行 青野道夫 赤木三郎 赤羽貞幸 赤羽久忠 秋山雅彦 阿久津純 芦寿一郎 足立 守 足立勝治 阿部国広 阿部正憲 天野一男 在田一則 安藤寿男 安間 莊 安間 恵 飯泉 滋 石井輝秋 石賀裕明 石崎国熙 石原舜三 石綿しげ子 石渡明 板谷徹丸 伊藤 孝 伊藤谷生 伊藤康人 井上 茂 井内美郎 猪間明俊 今岡照喜 井本伸広 井龍康文 岩松 暉 上杉 陽 上砂正一 上野将司 氏家 治 歌田 実 永広昌之 江藤哲人 大城逸朗 大角恒雄 大藤 茂 大友幸子 大庭 昇 大平芳久 大村一夫 大和田正明 小笠原憲四郎 緒方信一 岡田博有 岡村行信 小川 誠 小川勇二郎 沖村雄二 加賀美寛雄 笠原芳雄 梶間和彦 鹿島愛彦 片平忠實 勝田和利 加藤 潔 加藤孝幸 加藤碩一 加納 隆 狩野謙一 鎌田耕太郎 川崎智佑 川村寿郎 神戸信和 北里 洋 北村晃寿 木戸道男 君波和雄 木村 学 木村克己 木村純一 清川昌一 日下部吉彦 楠 利夫 熊井久雄 熊崎憲次 公文富士夫 倉本真一 黒川勝己 黒田登美雄 小出良幸 小玉喜三郎 小林哲夫 小松直幹 小松原琢 小松正幸 紺谷吉弘 斎藤 眞 斎藤靖二 酒井 彰 榊原正幸 嵯峨山積 佐々木和彦 笹田政克 佐藤 勝 佐藤博明 志岐常正 品田芳二郎 篠原 暁 柴 正博 島田昱郎 嶋本利彦 清水恵助 清水大吉郎 周藤賢治 白石和行 鈴木宇耕 鈴木克士 鈴木徳行 関 全寿 徐 垣 多井義郎 平 朝彦 高須 晃 高田 亮 高橋直樹 高橋堅造 高橋雅紀 高安克己 宝田晋治 田切美智雄 竹内 章 竹内 誠 竹内圭史 田崎和江 橘 彰一 巽 好幸 立石雅昭 田中 隆 玉生志郎 近重史朗 鎮西清高 塚原弘昭 富樫茂子 徳岡隆夫 徳橋秀一 利光誠一 戸野 聡 内藤 耕 内藤源太郎 中 孝仁 仲井 豊 中井睦美 中川 充 中島和一 中野啓二 仲谷英夫 成瀬 洋 新井田清信 新妻信明 西ヶ谷修 西川純一 西村 昭 西村祐二郎 丹羽俊二 野口達雄 野田浩司 野田雅之 野中義彦 延原尊美 髯本格 長谷川潔 長谷川美行 長谷義隆 波田重熙 早坂祥三 林 誠司 林 広樹 原 郁夫 樋口雄 平井明夫 平島崇男 平田大二 平林憲次 廣井美邦 福富幹男 藤井厚志 藤縄明彦 藤林紀枝 星 博幸 星野光雄 保柳康一 堀 秀道 堀 利栄 米谷盛壽郎 前川寛和 真砂祥之助 増田孝一郎 松浦一樹 松岡 篤 松里英男 松澤逸巳 松島信幸 松島義章 松葉千年 松原彰子 水谷伸治郎 水野清秀 道林克禎 三鍋久雄 三宅康幸 宮崎 浩 宮下由香里 宮本 昇 村井貞允 本尾朝光 盛谷智之 八尾 昭 八島隆一 矢内桂三 築浦進一 山岸宏光 山口はるか 山路 敦 山田純 山田守貞 山本高司 山本温彦 湯浅真人 横田修一郎 吉岡正俊 吉川周作 吉田鎮男 吉田武義 吉田史郎 脇田浩二 渡辺其久男 Simon Wallis 賛助会員（1）中央開発㈱ その他（2）「タービダイトの話」著者一同（徳橋秀一、徐 垣、七山 太、両角芳郎、八田明夫、鈴木祐一郎） 静岡大会見学旅行Ⅰ班（富士山）メンバー（細根清治、藤原みどり、佐藤隆春、伊藤 孝、鎌田浩毅、満岡孝、三宅康幸、中谷絵里、妙園園猛、清川昌一、川端清司、細谷正夫、山崎博史、倉橋稔幸、高橋 豊、松原義嘉、及川輝樹、Renee H. eilbronner、伊藤彰彦、染野 誠、吉本充宏、海野 進、千葉達朗、上杉 陽）



# 日本地質学会*News*

Vol.7 No.4 April 2004

The Geological Society of Japan News

日本地質学会/〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15  
井桁ビル 6F

編集委員長 大友幸子

TEL 03-5823-1150 FAX 03-5823-1156

main@geosociety.jp (庶務一般)

journal@geosociety.jp (編集)

http://www.geosociety.jp

## Contents

巻頭 募金委員会からのお願い

### 千葉大会ニュースNo.3 ……2

〈行事委員会〉第111年学術大会(千葉大会)でのシンポジウム・セッション・申込について

〈オンライン化委員会〉日本地質学会年会におけるオンライン講演申込・要旨投稿

### 表紙紹介 ……3

世界最大の縞状鉄鉱層：24.7億年前のブロックマン縞状鉄鉱層，ハマスレー層群，西オーストラリア(清川昌一・白尾元理)

### 特集：新しい風への期待 ……4

#### 新入生(学生，院生)，新入社員へむけてのメッセージ

新しい風への期待(平朝彦)/地球運命共同体の未来を共に担おう(木村学)/若手技術者へのエール(上砂正一)/最先端技術の動向に目を光らせよう(黒田潤一郎)

#### 特別シンポジウム 報告 ……8

「グローバルな情報発信機能の強化に向けて－日本発科学技術誌の強化－」(宮下純夫)

#### 案内 ……10

平成16年度 第1回 建設技術者のための地質学教養セミナー：「地球の過去・現在・未来」

#### 各賞・助成 ……10

2004年度 地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者募集/トヨタ財団2004(平成16)年度研究助成

#### 公募 ……10

大阪工業大学教員公募/東洋大学教員公募/核燃料サイクル開発機構平成16年度任期付研究員追加公募

#### 出版物在庫案内 ……12

#### CALENDAR ……13

#### 紹介 ……14

技術者の倫理：信頼されるエンジニアをめざして 今村遼平 著(足立勝治)/オラビ瀬の洞門 西山忠男 著(石渡明)

#### 博物館紹介 57 ……16

ミュージアムパーク茨城県自然博物館(滝本秀夫)

#### 委員会だより ……18

環境地質研究委員会 第14回環境地質学シンポジウムの講演論文募集のお知らせ

#### 地学教育のページ ……19

お知らせ：文部科学省「サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業」二次募集始まる

#### The Island Arcオンライン閲覧(登録)の方法 ……19

#### 支部コーナー ……20

近畿・四国・西日本支部 合同例会シンポジウム「西南日本の中・古生代テクトニクス」の開催のお知らせ/関東支部 総会・講演会のお知らせ

#### 院生コーナー ……22

大学院生(若手)にとっての地質学会(片山郁夫)/アメリカ地質学会に参加して(北崎朋美)

#### 学会記事 ……24

2004年第6回理事会議事録

2004年第7回理事会議事録

2004年第8回理事会議事録

#### フィールドジオロジー(全9巻)割引予約販売のお知らせ ……30

広告取扱：株式会社廣業社

〒104-0061 東京都中央区銀座8-2-9 電話 03-3571-0997

印刷・製本：日本印刷株式会社



## 第111年学術大会(千葉大会)でのシンポジウム・セッション・申込について

日本地質学会行事委員会

2004年9月18日(土)～20日(月)の日程で千葉大学を中心として第111年学術大会が千葉市で開かれます。概略はニュース誌1月号に紹介されています。今回は、次号5月号の予告に向けて現在、行事委員会で検討されている内容に関してご説明します。

### <シンポジウム>

千葉大会では、地質学と日本地質学会の新たな飛躍を目指すため、6件のシンポジウムを行います。シンポジウムでは、地質学界の研究成果の普及や人間社会に密接に関連した地質学研究(地球環境の変遷、地質災害)などの内容が計画されています。

### <セッション>

トピックセッション(10件程度)、レギュラーセッション(20件程度)を予定しています。これらの日程は、現在のところシンポジウムが18日(土)、セッション(口頭)が主に19-20日、セッション(ポスター)が18-20日を予定しています。セッションではポスター発表を推奨し、大会場を用意しています。

詳細については、次号ニュース誌5月号に第111年学術大会(千葉大会)予告が掲載されます。ご参照下さい。

### <講演申込と要旨の投稿>

**講演申込・要旨投稿を千葉大会から新たにWEB上のオンラインで行います。** これまでのように郵送での申し込み、投稿も受け付けますが、オンラインでの投稿を推奨します。地球惑星科学合同大会などで、オンライン投稿の経験のある方にはなじみやすい方法だと思いますが、地質学会としては初めてのことで、よろしくご協力をお願いいたします。

### <講演申込・要旨投稿のメ切>

今回から、**申込と投稿が同時となります。郵送が7月10日(土)必着、オンラインが7月14日(水)**を予定しています。

### <講演要旨の査読>

千葉大会から、**行事委員会が講演要旨についての査読(適正チェック)を行います。** 会則第4条に示される日本地質学会の目的並びに倫理綱領に反していないか、ということについてのみチェックをします。いずれかの条項に反していると判断される場合、行事委員会は内容の修正を求めるか、講演申請を受理しないことがあります。これらの措置に異議のある場合は、日本地質学会法務委員会に異議申立ができます。

## 日本地質学会年会におけるオンライン講演申込・要旨投稿

日本地質学会オンライン化委員会

オンライン化委員会は学会運営のオンライン化に関するアンケート結果を基に地質学会として実現可能なものから順次オンライン化や電子化を進めるという方針で活動を続けています。2004年度の日本地質学会年会・総会が2004年9月18日～20日に千葉大学を会場に開催されます。この千葉大会より、会員アンケートで希望が多かった地質学会年会・総会の講演申込、要旨投稿のオンライン化を実施することとなりました。地質学会のホームページからオンラインによる講演申込みと講演要旨の電子投稿が可能になります。郵便による講演申込みと印刷版講演要旨の投稿も従来通り実施します。以下にオンライン講演申込・講演要旨投稿の概要を簡潔に説明します。

### (1) 日程(予定に変更があれば学会ホームページに掲載します。)

講演申込、講演要旨電子投稿用ホームページの公開:	5月10日(予定)
郵送による講演申込、講演要旨送付メ切(必着):	7月10日(予定)
オンラインによる講演申込、講演要旨電子投稿のメ切:	7月14日(予定)

### (2) オンライン申込みの手順

#### ①学会ホームページ((<http://www.geosociety.jp/>))へ訪問(アクセス)

地質学会ホームページ(HP)に発表申込みのページと講演要旨電子投稿のページがリンクされています。5月10日に公開し、申込みを開始する予定です。

#### ②講演申込

学会HPにリンクされた講演申込ページから必要な情報を入力してください。情報送信後に登録されたメールアドレスへ講演要旨電子投稿と登録情報更新に必要なパスワードが送信されます。

#### ③講演要旨の電子投稿

学会HPにリンクされた電子投稿ページから講演要旨を投稿してください。電子投稿を開始するには講演申込みをした直後に送信されてきたパスワードと登録したメールアドレスが必要です。これらを用いてネットワークに入る(ログインする)と申込者が認証されます。最初に保証及び著作権同意書に同意するためのページが現れます。同意文書を読み、同意した申込者のみが、登録情報の更新と講演要旨の電子投稿を行うことができます。電子投稿のためのメニューはページの最下部にあります。

※注意)送信できる電子ファイルはAdobe社が策定したPDF(Portable Document Format)ファイルのみです。書籍やインターネットで多数のPDFファイル作成ソフトが紹介されていますのでご活用下さい。

#### ④登録情報の更新と講演要旨の再送信

登録した各種情報と講演要旨はメ切までに、何度でも更新することができます。講演要旨を再度電子投稿すると、上書きされるため以前の講演要旨の電子ファイルは消失します。

#### ⑤講演申込の受理

申込メ切後に受理された講演の申込者に受理されたことを伝

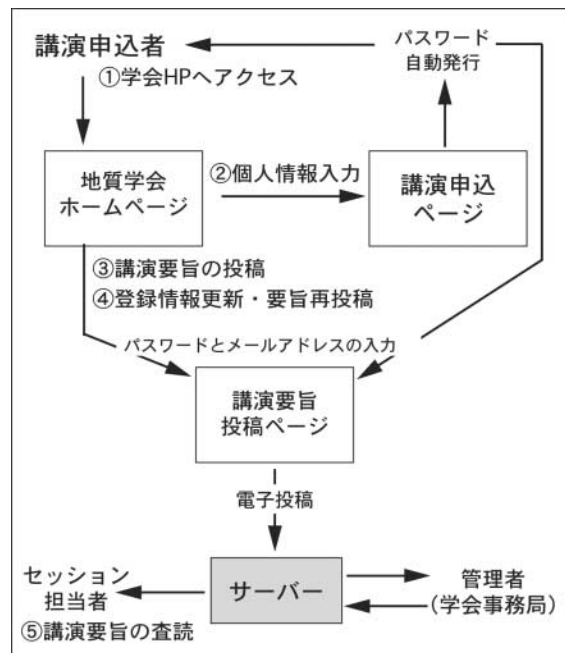
える電子メールが届きます。受理されない場合や発表するセッションが第一希望ではない場合にはセッション担当者より個別に連絡があります。

### (3) 個人情報の保護

日本地質学会は、オンライン講演申込によって入力された個人情報を、個人情報保護法に基づいて適切に取り扱います。

### (4) その他

郵送による講演申込、同意書の送付、講演要旨の投稿も従来通り実施します。講演要旨の作成方法はニュース誌に記載されています。郵送による印刷版の講演要旨も、PDFファイルの講演要旨も同じ様式です。



## 表紙紹介

### 世界最大の縞状鉄鉱層：

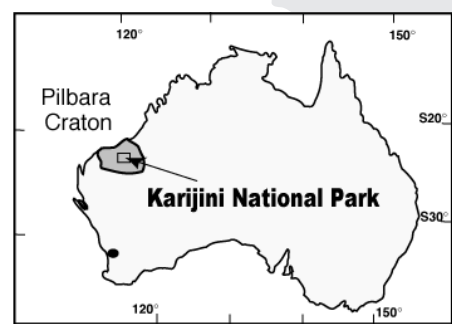
### 24.7億年前のブロックマン縞状鉄鉱層，ハマスレー層群，西オーストラリア

### The largest iron formation in the world: 2.47 Ga-old Brockman iron Formation of the Hamersley Group, Western Australia.

世界最大の鉄鉱層ブロックマン縞状鉄鉱層（層厚650m）は、西オーストラリア、ピルバラクラトン上に南北100km・東西300kmの広い範囲に分布する。特に水平な中央部の鉄鉱層は深く浸食され、さまざまな峡谷美をなすので、カリジニ国立公園（Karijini National Park）として保護されている。ブロックマン鉄鉱層は、太古代から原生代への移行期に、鉄の酸化作用によって海洋底に堆積した鉄鉱層である。これは、光合成によって酸素を発生させるシアノバクテリアが当時大量に発生し、大気酸素濃度を上昇させたことの重要な証拠とされる。

写真はカリジニ国立公園のKnox峡谷。ここでは水平な縞状鉄鉱層を川が侵食し、幅数mの鋭い峡谷をつくり、撮影地点はその最狭部にあたる。厚さ数cmの鉄に富む赤・茶色の層と白色の石英層が互層をなし、厚さ数百mの断崖に水平な縞模様をつくる。これらの縞々の残す意味は、当時のミランコビッチサイクルや熱水活動の歴史記録など諸説があるが、まだ決着はついていない。

オーストラリアはブラジルに次ぐ世界第2の鉄鉱石輸出国で、その大部分はブロックマン縞状鉄鉱層からの露天掘りで採掘され



たものである。品位鉄90%以上の鉄鉱石は20億年前のカプリコン造山運動で、褶曲した南部の褶曲軸部に濃集している。採掘された鉄鉱石の45%は日本に輸出され、これは日本の輸入する鉄鉱石の56%に相当する。さまざまな鉄製品で支えられている私たちの生活は、25億年前の生命活動の恩恵を受けているのである。

(文：清川昌一 Shoichi KIYOKAWA 写真：白尾元理 Motomaro SHIRAO)



## 新しい風への期待

会長 平 朝彦 (海洋研究開発機構)

新会員の皆様, また, 会員の皆様, 4月  
は新しい生活を始める方々が沢山お  
ります。この機会に, とくに“フレッシュマン”  
として挑戦を始める人々に一言, 挨拶を申  
し上げます。

もし, 私が現在の基礎科学における最大  
の課題は何かと聞かれれば, それは「生命  
の起源」であると答えるでしょう。また,  
応用科学における最大の課題は何かと聞か

れれば「地球環境の理解と予測」, そして我が国の直面する最大の  
社会的課題は「巨大地震対策」と回答するでしょう。これには色々  
な考え方があると思いますが, 殆どの人が, これらが重要な課題で  
あるということでは一致するでしょう。

この何れの課題とも共通する学問分野が唯一存在します。それは  
地質学です。生命の起源に関しては, 地質学的な探査や, 生命科学  
と地質学との共同研究が不可欠です。今, 火星においてはロボット  
地質学者が, 生命の起源, そして地球環境の理解のための基礎的な

データを集めています。世界の人々が地質学の活躍に目を見張って  
います。

地震対策については, 今までの地震学的なアプローチの限界がは  
っきりし, 地震の物質科学, 強振動と地盤対策, など幅広い分野の  
協力が必要となってきました。地質学が新しい地震科学の中核をな  
すべき分野として台頭してきたのです。

地質学が今日の要請に答える学問として重要なことはお分かり頂  
けたと思います。それでは, 今, 我が国の地質学がその要請に十分  
に答えているか, と自問すれば, 「これからが勝負だ」と答えざる  
を得ません。科学の発展は, 志の高い若い人材の集まりと, その中  
での議論や情報のやり取りから誕生することは, 過去の歴史が明瞭  
に教えています。

日本地質学会は, 今, そのような役目を果たすべく飛躍しようと  
しています。そのためには, ぜひとも, 皆さんの積極的な参加が必要  
です。いや, 皆さんこそが, 科学の開拓のために, 学会の主役と  
なり新風を吹き込んで下さい。期待しています!

## 地球運命共同体の未来を共に担おう

副会長 木村 学 (東京大学大学院・理学系研究科)

心踊る新しい春が, まためぐって来ました。学生院生諸君は卒  
業論文や学位論文へ向けて, 心を一新していることと思います。私  
も春になると, 学生諸君を送りだした後の安堵とともに, 新しい学  
生院生諸君を前に, 「共に頑張ろう」と, 心構えを新たにできる機会  
を迎えます。

私達は, どのような思いに突き動かされて, 研究をしている, あ  
るいはしようとしているのでしょうか。理学部系では, その理念  
が古くから「真理の探究」すなわち「知りたい」という思いに突き  
動かされ, 「知る」ことが目的とされてきました。一方, 工学部系  
では, 既に獲得された自然に関する知識を応用して, 人間社会に  
「役に立つ」技術を開発することを目的とするとされてきました。  
すなわち, 「役に立ちたい」という思いに突き動かされて来たので  
す。科学に携わる者にとって, この2つの思いは根源的であり, ど  
ちらかに対する思いの強さの違いはあっても, 相互に密接な関連を  
持っています。

私達の「知りたい」という思いの根源は, 「私達は何もの? 私  
達はどこから来て, どこへ行こうとしているの? そして今, いる  
のはどこ?」というものであります。人類は生まれて以来, これら  
を一貫して問い続けてきました。この問いに答える作業には, かつ  
ての宗教に代わり, 17世紀以降, 自然科学が中心的な役割を果たす  
ようになりました。それは同時に, 人類が抱えてきた自然への盲目的  
畏怖からの解放を意味します。知識を何よりの武器としてきた人  
類にとって, 「知ること」は, 単に知的好奇心を満たすにとどまら  
ず, 生きる上で欠かすことのできない「安心・安全を求める本能」  
と密接に結びついているのです。つまり私達が新しい発見に感動す  
るのは, いわば本能的欲喜なのです。「知ること」によってもたら  
された科学の発展が, 大いに「役に立ち」, 今日, 地球における人  
類の「繁栄」をもたらしたことはいうまでもありません。

地質学は, 私達の住む地球, そしてそこで起こる様々な現象を,  
この一連の根源的問いかけの中から切り取って問いかけ, それに答

えることを目的として最も早くに成立した  
地球の科学でした。その後, 科学の進展は  
細分化を促し, 現象や対象に応じて多くの  
個別的地球諸科学が成立してきました。ま  
た20世紀になると物理量として地球や現象  
を把握する観測や理論の体系が急速に整え  
られ, 地球物理学が成立しました。そして,  
20世紀後半, プレートテクトニクスの成立  
によって, 一旦細分化した地球の科学は「地球」を根源的・総合的  
に問いかける観点を再び復活させ, 地球に対する理解は飛躍的に深  
まりました。

プレートテクトニクスの成立から30年以上が経過した現在, 地球  
人口の爆発的増加による影響は, あたかも「イナゴの大群」のよう  
に地球の総てを食い尽くす勢いで進行しています。そして, 資源・  
エネルギー問題や地球環境問題という, 地球と人類の未来に関わる  
新たな重大な問題を提示するにいたっています。一方, 人口密集地  
を襲う地震など相次ぐ自然災害は, 生きている地球が人類にもたら  
す「最終大量殺りく兵器」として残されています。これらは, 地球  
に住む「私達はどこへ行こうとしているの?」という問いを深刻な  
ものとしているのです。

地質学は, 過去に地球が幾度も激しい環境変動を経験し, 全球凍  
結や全球温室があったこと, 幾度も生命の大量絶滅を経験したことを  
明らかにしました。また地質学は, それらの地球表層の環境変動  
が, 短期的には地震や火山活動, 長期的には造山運動や大陸の離合  
集散などとして把握される地球内部からのエネルギーの放出, そし  
て太陽活動など地球外部からの刺激への応答として形成され, 「生  
きた地球システム」の相互作用の結果であることも明らかにしまし  
た。それらは未来においても引き続き起こることを示しています。  
地球の歴史を通じて, 人類を含む生物は圧倒的に地球内部や外部か  
らの影響を「受ける」側にありました。未曾有の「繁栄」を遂げ,





今や地球に影響を「及ぼす」までになった人類の地球環境への影響は、これまでの地球が経験したことの無い未知の領域なのです。

この地球運命共同体の未来に関する問いが如何に難問であろうとも、このことにきちんと答えられるのは科学をおいてほかにはありません。そしてその答えは地球を最も良く知る地球科学が答えなければならぬ、答えたいと思いませんか？

私達は、地球を「知りたい」あるいは人類を含めた地球運命共同体の持続に「役に立ちたい」という思いに突き動かされて地質学、地球科学という道にいます。そして今、私達のその思いは人類と地球の未来を託される程の期待と、重みの中にあるのです。若者諸君！共に頑張ろう。



## 若手技術者へのエール

理事・環境地質部会・環境地質研究委員会 上砂正一（明治コンサルタント（株））

新社会人となられた皆様、就職おめでとうございます。

現在日本地質学会の会員構成は大学人が30%、官公庁が13%、小中高の教員が14%そして民間企業に働く人たちが32%、その他11%となっております（2002年会員名簿より）。したがって、地質学会員のほぼ3人に1人が民間企業で地質に関する業務に携わっていることとなります。

私が所属している会社は地質調査・測量・設計などを行っておりいわゆる建設コンサルタントです。主たる業務である地質調査部門では地表地質踏査、空中写真の判読、ボーリング、各種計測・試験や分析、物理探査などの手法を用いて、地下の見えない部分の情報を引き出し地質学の知識や理論を基礎に、地下地質の状態（構成物質、物理的性質、深さ、地下水の存在、有害物質の有無など）を明らかにした調査報告書を成果品としています。

ここで、地質調査業について簡単にその背景を述べておきます。地質コンサルタントは、総務庁の日本建設産業分類で測量業、建築設計業、設計製図業等とともに「土木建築サービス業」に分類されています（第1表）。

第1表の建築設計業、設計製図業などの建設コンサルタントは河川・ダム・道路や鉄道などの設計業務を行うものとされてきましたが、最近では、測量、地質調査を含め広義に建設コンサルタントと言うこともあります（第1図）。

地質調査業は地質調査を専門とする業種ですが、ボーリング調査から始めた企業、地表踏査、土木・水文地質図作成、ボーリングデータを評価してきた企業、弾性波探査等の物理探査から始めた企業、そして石炭・金属鉱業会社の地質部から独立した企業などがあります。明治コンサルタントは、石炭の明治鉱業から独立した会社です。

プロジェクトの流れの中で建設コンサルタントの役割は工事施工前に実施されるもので、産業構造の上流側にあり成果品もそのほと

第1表 地質調査業の業種

大分類	中分類	小分類	細分類
サービス業	専門サービス業	土木建築サービス業	建設設計業 測量業 地質調査業

んどは印刷物（報告書）です。その意味からもコンサルタントはサービス業と言えるでしょう。

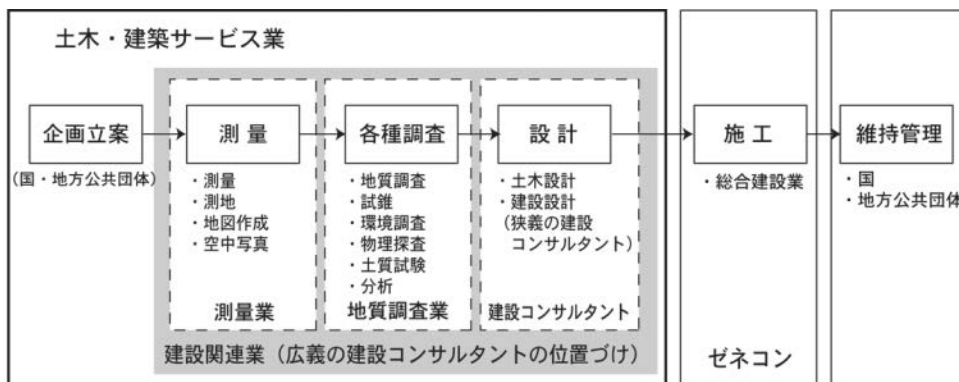
また、測量、地質調査、土木設計（狭義の建設コンサルタント）は、本来行政が自ら行ってきた分野でありましたが、戦後の高度成長の始まりとなった昭和30年代はじめ頃から徐々に民間に委託されるようになりました。名神高速道路や東海道新幹線開通を契機に、社会資本の整備が行われビッグプロジェクトが次々に企画され測量・地質・建設コンサルタントは飛躍的に発展し、国交省ではこの3業種を「建設関連業」として位置づけています。

### 建設コンサルタントの資格制度

高度な技術を要求される業務は「管理技術者」や「照査技術者」に対して「技術士（業務に該当する部門）またはこれと同等の能力と経験を有する者およびRCCM（シビル コンサルティング マネジャ：Registered Civil Engineering Consulting Manager）資格保有者でなければ実施できないと定められております。建設コンサルタントの技術者は専門的な知識を有する資格が求められます。

「技術士」は「技術士法」（昭和32年制定、昭和58年全面改正、平成12年4月一部改正）に基づいて行われる国家試験（「技術士第二次試験」）に合格し、登録した人だけに与えられる称号です。

法的には「技術士の名称を用いて、科学技術（人文科学のみに係るものを除く。以下同じ。）に関する高等の専門的応用能力を必要とする事項についての計画、研究、設計、分析、試験、評価又はこれらに関する指導の業務（他の法律においてその業務を行うことが制限されている業務を除く。）を行う者をいう。」と定義づけられ、科学技術の応用面に携わる技術者にとって最も権威のある資格とい



第1図 プロジェクトにおける（広義の）建設コンサルタントの位置づけ

第2表 平成15年度関係部門別合格者数と登録者数（日本技術士会および文部科学省技術士審議会資料より作成）

技術部門	受験者数 (人)	合格者数 (人)	合格率 (%)	技術士登録者数 (平成11年3月末日 現在)
建設	2,814	436	15.5	18,420
農業	217	43	19.8	1,924
林業	33	11	33.3	447
応用理学	317	59	18.6	2,244
生物工学	13	5	38.5	52
環境	170	28	16.5	192

えます。

建設関連業に該当する技術士の部門は機械部門の流体機械、建設、鉱山、荷役及び運搬機械又は機械設備、電気・電子部門、建設部門、水道部門の上水道及び工業用水道又は下水道、農業部門の農業土木、林業部門の森林土木、水産部門の水産土木、応用理学部門の地質などがあたります。第2表は平成15年度合格者と平成11年3月末時点での登録者数です。

一方、「技術士補」は「技術士」同様、国家試験（「技術士第一次試験」）に合格し登録した人だけに与えられる称号です。技術士補は技術士となるための第1関門で、その資格がないと技術士の試験を受けられないのでなるべく早い時期に（技術士補を）取得することを薦めます。

#### コンサルタント技術者の役割

公共施設については、これまで国や地方自治体が事業主体となり整備運営を行ってきました。しかし、1990年のバブル景気崩壊後、内需の拡大が求められる一方、財政事情の悪化もあり、あらためて民間活力を活用した社会資本の整備運営が注目されています。

このような背景の中で、事業者がコンサルタント技術者に求めるのは技術パートナーとして、中立・独立な立場を堅持し、実状に応じた専門技術分野を支援することです。地質コンサルタントは事業者・設計者・施工者のコーディネータとなり、豊かな経験と高度な知識を生かしプロジェクトをマネジメントしコスト低減に寄与するなど新しい役割を担っていくことも重要です。

発注者のニーズに的確に応えると同時に技術的情報が分かり易く表現されている成果品（報告書）は施工者にとっても安心して確実に施工できることにつながります。そのため、専門技術としての一定水準を満たし、法律や経済・文化にも精通した総合的な技術力を有していることが（地質）コンサルタントの役割の拡大につながる第一歩となります。

特に、環境地質面では探査内容が多様化、高度化、総合化しており事業の実施において安全な機能の確保と経済的効率性を確保するために、（地質）コンサルタントの果たす役割はますます重要になっています。

#### 活躍する女性技術者

理学部地質をはじめとして工学部や農学部への女性進学者の増加に相まって建設コンサルタント業界へ就職を希望する女子学生も年々増加傾向にあります。企業も平成11年4月の男女雇用機会均等法の改正や建設コンサルタント業務の多様化で、多くの建設関連企



写真1 地質汚染現場で活躍する松山技術士

業の技術部門で女性技術者が活躍している姿を見ることができません。特に、あまり現場作業を伴わない計画や設計分野での進出が顕著です。

一方、地質コンサルタント業務は山間部の現場作業や重量物を扱うなど女性技術者には困難とされてきました。しかし、近年は地質汚染調査業務や環境アセスメント調査が増大し分析を伴う業務や聞き取り調査など女性ならではの繊細な性格が要求され、徐々に活躍の場が広まりつつあります。さらに、技術士、RCCM、環境計量士や地質調査技士といった資格を取る女性技術者も多くなり、女性技術者の活躍がめざましく環境分野での期待が高まっています。

会員の松山紀香さんは現在有限会社ジーアールの代表取締役で活断層調査を長年手がけています。最近はその経験を生かし地質汚染現場で詳細なコアチェック、分析などを行っています。昨年は地質汚染診断士の資格を取られ、ますます活躍の場を広げられています（写真1）。

#### おわりに

最近では地球環境についての関心が深まっています。建設現場でも景観を重視した設計・施工がなされるようになってきています。また、近年の製造業などを中心とした再構築で遊休資産の売却がすすみ、土壌汚染・地下水汚染といった地質汚染に絡んだ土地が増大しており、それは国土の不良債権として取り扱われその完全浄化を図り、きれいな国土を次世代へ引き継ぐのが調査技術者の責務となっています。日本地質学会では関東支部、環境地質研究委員会が中心となって地質汚染の調査・対策技術を確立してきました。社会的中立性と理科学的立場において地質探査と設計・工事に関する指導や助言を行う技術者を育成するために技術者研修が行われています。また、学術大会や研究委員会で開催されるシンポジウムも随時開催されており、企業に勤める若手技術者は、積極的に参加して利用すべきと思います。

支部活動や学会活動は企業人にとって重要な人脈を増やす格好の場となるでしょう。さらに、日頃の成果を学術大会、シンポジウムで発表することはスキルアップにつながります。若手技術者の今後の発展を期待するとともに、未加入の地質技術者の入会を歓迎いたします。

今後、法人化される日本地質学会に一層の普及活動と会員サービスの向上を期待しつつ、若手技術者へエールを贈りたいと思います。

## 最先端技術の動向に目を光らせよう：大学院生へのメッセージ

評議員 黒田潤一郎（東京大学大学院理学系研究科）



地質学系の大学院に進学された皆様、ご進学おめでとうございます。将来への希望を抱いて新たな生活を楽しんでおられることでしょう。みなさんは、地質学のこういったところに魅力を感じてこの道を選択されたのでしょうか？私は、過去の地球環境の様相が堆積物から読み取れるというところに魅力を感じます。しかし、堆積物は精度の悪いレコーダーに例えられるように、古環境変動を完璧に読み取れることは現状では不可能です。ですから、地質学的手法をもとに過去の地球環境を解明しようとする者にとって、この精度の悪いレコーダーから当時の環境に関する情報をどれだけ取り出せるかが腕の見せ所だと思います。その昔、偉大なる先輩方はフィールドを歩き、露頭で観察を行ったり、岩石試料の薄片を作って顕微鏡で観察したり、あるいは粉末試料を作って化学分析を行うなどして堆積物から過去の環境に関する情報を探り出してきました。そして今、私たちは目覚ましい技術の進歩により、様々な分析機器や高性能コンピューターを用いて地質学的研究を進めることが可能な環境にいます。私自身はナノサイエンスやナノテクノロジーに新たな発見への道を見出せないかと思い、模索しているところです。ここで、私の研究について少しお話をさせていただきたいと思ひます。

私は現在、白亜紀海洋無酸素イベントの研究をしています。これは、白亜紀のある時期（アプチアン、セノマニアンなど）に、世界中の大洋底に有機物や硫化物に異常に富む「黒色頁岩」という地層がほぼ同時期に堆積したという環境イベントです。短期間に地球規模で特異な海洋環境（無酸素環境や高基礎生産性など、有機物の堆積に適した環境）が出現したと解釈されています。しかし海洋無酸素イベントが具体的にどのような環境であったのかについては、よくわかっていません。そこで、この黒色頁岩（イタリアのポナレリ層。厚さ約1m）に関して、まず物質科学的視点に立ち戻って詳細に記載し、化学的特徴をラミナスケールでまとめてきました。その結果、数多くの興味深い知見が得られました。その中でも特に全有機炭素の安定同位体組成について面白い発見がありました。ポナレリ層中に、周囲の層準に比べて12%も軽い炭素同位体組成（-36%）を示す粘土層があったのです。この値は、メタンのような軽い炭素を代謝している化学合成生物由来の有機物が関与している可能性を示唆し、海洋無酸素イベントにおける生物地球化学プロセスにおいて、メタンの存在が重要であったことが予想されます。これまでに、この仮説を検証すべく有機地球化学的分析を行ってきたのですが、今のところ化学合成生物の痕跡を直接的に示す証拠は得られていません。おそらく、黒色頁岩中の有機物のほとんどが不溶性有機物として存在しているため、従来の手法では軽い炭素同位体比の原因となっている有機物を抽出できないことにあるのでしょう。しかし、不溶性有機物の同位体組成を直接測定することができれば、この問題が打破できるはずで、ここで先に述べた「ナノサイエンス」が登場するのです。近年の分析機器技術の進展により、数百nmの空間分解能で物質表面の同位体分析ができる二次イオン質量分析計が開発されました。そして、この機器は地質試料の測定を目的とするものとしては世界で初めて東京大学海洋研究所に導入されます。この機器で炭素同位体分析の手法を確立することができれば、黒色頁岩中の有機物粒子の炭素同位体を直接測定でき、化学合成生物由来の有機物の有無を検証することができるはずで、過去に例のない機器ですので、分析手法を確立することから始めなければなりません。そこには必ず明るい未来が待っていると確信しています。

写真1 さまざまな分析機器に触れることでアイデアも膨らみます。高知大洋コア研究センター見学ツアーにて、「これが質量分析計です」「おー」「すげー」



今回は、多くの事例をあげることができませんでしたが、世の中には魅力的な分析機器がたくさんあります。それらは私たちの研究を飛躍的に進展させてくれる可能性を秘めているはずで、私は、古典的な地質学的手法（野外調査や薄片観察など）の重要性を認識しつつ、最先端の科学技術を駆使してどんどん新しい研究をしていきたいと思っています。僥越ながら申し上げますと、新入大学院生の皆さんには露頭を見たり、顕微鏡を見たりする目を養いつつ、最先端技術の動向に目を光らせるようになってほしいと思います。ただし一介の学生にとっては、最先端分析機器を購入することはもちろん、エンドユーザーとして機器を使用することも難しい場合が多いと思います。私は、日本地質学会に、このような学生による最先端機器の利用を支援してくれる体制を構築してもらえないかと期待しています。また、そのようなことを自分自身が積極的に発言していかなければならないとも思います。

最後になりましたが、積極的に地質学会の活動に参加したいという意欲のある方は、ぜひ代議員や評議員に立候補してほしいと思います。評議員会という地質学会の未来を方向づける重要な組織に2名の大学院生枠があるということは、地質学会が非常にリベラルな組織であるということを示しています。地質学会には「若い世代の意見を取り入れよう」という意識を持った方が多いと感じます。この環境を最大限利用し、私たち大学院生学生の意見を学会活動に反映させて行きたいものです。

小文に関して、ご質問、コメント等がありましたら、黒田(kuroda@ori.u-tokyo.ac.jp)までメールをお送り下さい。お待ちしております。



写真2 とにかくにも地質学は露頭から。2003年11月に行われた室戸巡検での一コマ。四万十帯砂岩泥岩互層中に発達する砂岩脈の前に一同考え込む（巡検写真というよりCDアルバムのジャケット写真みたいですね）。



## 特別シンポジウム 報告

### 「グローバルな情報発信機能の強化に向けて—日本発科学技術誌の強化—」

日本地質学会編集出版部会  
担当理事 宮下純夫

標記のシンポジウムが2月27日に日本学術会議において開催された。主催は特別シンポジウム実行委員会で、共催は日本工学会、日本学術振興会、科学技術振興機構、国立情報学研究所、後援は文部科学省と日本学術会議である。地質学会からは宮下が参加した。以下に当日の主な論点を紹介するとともに感想を述べる。まず当日のプログラムを示す。

#### プログラム

##### 第一部

- 主催者挨拶 実行委員長 工学院大学理事長 大橋秀雄  
来賓挨拶 文部科学省研究振興局局长 石川 明  
来賓挨拶 衆議院議員 (自民党科学技術部会長)  
基調講演 日本からの科学技術発信：その歴史と21世紀への課題  
日本学術会議会長 黒川 清  
基調講演 国際水準の研究情報発信システムの一体的整備  
理化学研究所理事長 野依良治  
特別講演 我が国欧文誌の現状と問題点  
日本学術会議情報発信研連委員会 村瀬俊一

##### 第二部

パネルディスカッション「日本発科学論文誌の強化」—日本発の科学情報発信はどのようにすべきか？

- 趣旨説明 大阪大学フロンティア研究機構 特任教授 西村吉雄  
パネリスト  
我が国の医学研究、とくに臨床研究の国際貢献度  
京都大学 福井次矢  
すぐれた国際誌の発刊は何故必要か—生命科学から見て—  
長浜バイオ大学バイオサイエンス学部長 郷 通子  
新国際学術総合誌の刊行を目指して  
国立情報学研究所長 末松安晴  
物理系学術誌刊行協会の設立 甲南大学 佐藤文隆  
研究成果の情報発信を取り巻く問題点とその解決に向けて  
科学技術振興機構理事 北沢宏一  
グローバルな情報発信機能の強化に向けて  
日本電気株式会社代表取締役会長 佐々木元

パネルディスカッション

提言の採択

日本地質学会では今年の秋の総会での法人化に向けて準備を進めているが、地質学雑誌についても一層魅力ある学術誌を目指してワーキンググループが設置されて検討が始まりつつある。したがって今回の特別シンポジウムのテーマは日本地質学会にとってもタイムリーかつ極めて重要な問題であり、当日の論議された内容を紹介することは意義あるものと考え、当日のシンポジウムでは多岐にわたる問題が議論されており、その全てをここでは紹介出来ないが、日本地質学会や地球科学界全体にとって極めて重要と思われる点が多々あった。そうした点を中心にここでは紹介する。

第一部の来賓挨拶では、科学技術基本法の制定により、科学技術

立国を宣言して以降、科学技術関係の予算は増大しつつあり成果も大きく上がってきているが、情報発信の点ではまだ遅れており、改善が必要であることが強調された。

最初に基調講演を行った黒川学術会議会長は、科学の歴史を振り返りつつ、今や科学者が社会や国際的に果たさなければならない役割が急激に増大していることを、環境問題や国連の諸活動の中での例を上げて指摘した。こうした中で、日本の科学者の情報発信の現状について、各学会が努力して刊行している英文誌が負担になってきている現状やNatureやScienceをどう評価すべきなのかを問いつけた。また、アジアの中での日本という視点が大切ではないかという問題提起を行った。

もう一つの基調講演において、野依良治氏は研究成果は発表されてこそ初めて日の目を見ること、芸術やスポーツなどに関しても適切な公開・発表の場が準備されているが、学術研究においてはそうした場の設定は個別の学協会に依存している現状にあること、自然科学分野における世界的な英文論文における日本のシェアは12%に達しているがその八割が海外の雑誌に発表されている現状にあり、知的財産の深刻な流出が生じていること、今、国産のナショナルブランドを作り上げる重要性について訴えた。野依氏は、サッカークラブのオーナーでの試合に例えて、しばしば国際誌においては査読者が競争相手であることが多く、不可解な現象が生じている問題についても紹介し、このままでは思考プロセスまでも西洋的思考に支配されてしまうことを危惧していることを述べた。

基調報告を行った村橋氏は、日本の学協会が発行している欧文誌の現状について詳しく紹介し、外国誌への掲載が増大しつつある一方、国産欧文誌への投稿が減少しつつある現状を示した。また、冊子体から電子ジャーナルへの変化が海外や国内で急速に進行しつつあること、その結果国際的商業出版資本の支配力が増しており、情報ネットワークの覇権が握られつつあることや、知的財産の流出とその買い戻しといった悪循環に陥りつつあること、先進国では過去の印刷物も含めてアーカイブ化が進行しているが、日本ではその歩みは遅々としていること、これまでの遺産のアーカイブ化(PDF化)は国の文化財であり、学協会の独自努力による電子ジャーナルやアーカイブ化を支援する必要があることを強調した。村橋氏は電子ジャーナル化によって、受け付けから公開までの期間が大幅に短縮されている利点などを強調するとともに、この間、日本における電子ジャーナル化には、1)学会の独自の努力によるもの(物理関係)、2)J-Stageを利用したもの(日本化学会)、3)海外サイトを利用したものの3つのパターンがあるが、いずれも電子ジャーナル化に伴ってリンクを効果的に張ったところでは、アクセス数が飛躍的に増大していることを示した。また、インパクトファクターに関する問題点を指摘した。

パネルディスカッションでは、国際的国家的プロジェクトとして進められたヒトゲノム解析などの膨大な情報が、新たに創設された、投稿者が高価な投稿料(1500ドル)を支払い、誰でもが完全にアクセス出来る新しいタイプのインターネットジャーナルにデータベースとして盛り込まれつつある現状や、『国際学術情報流通基盤整備事業』(SPARC/JAPAN)の理念とその進行状況、新国際総合誌の構想、物理系学術誌刊行協会の設立と物理系学術誌の統合・電子化の経緯、とくにその中での「新しい第三極を形成する」といった方針を掲げた意味、従来、いわば同好の士の集まりであった学協会による情報発信は同好の士の中に限定されてきたが、公共財としての学会情報(=学術誌)に鍵をかけて良いのか、かけないとする費用は誰が支払うべきなのか、過大すぎるインパクトファクターへの信仰の現状と問題点、アジア諸国における共通した問題とアジアにおける標準化の達成が可能かなど、多様な問題が提起された。

自由討論では、インパクトファクターを巡る問題や電子ジャーナル化への初期投資の費用負担、高度なセキュリティを保つ問題などが活発に議論された。

最後に特別シンポジウム参加者一同による決議が採択された。全文は長大なので骨子のみをここでは紹介する。

平成16年2月27日

研究成果の国際的な発信力強化に向けての提言

特別シンポジウム参加者一同

1. 日本発の英文論文誌の発展・育成を通じて国際的な研究発信力を高めるためには、学協会の取り組み態勢を抜本的に強化することが必要であり、またそれに対する国の効果的な支援が求められる。
2. 電子ジャーナル、電子アーカイブ、電子リンク等、情報流通基盤の早急な整備を図る。
3. わが国の論文誌の発展に不可欠な前提として、個別論文の価値を正しく評価する気風を確立する。

#### <参加の感想>

物理や化学系などの学協会では、電子化への努力が数年前から開始されており、1つのタイプを生み出しているのに比較すると、地質学会や地球科学関係の学会での現状を考えると、早急かつ大胆な対応が強く求められているのではないだろうか。地質学会では公式欧文誌として、関連4学会の協力・支援を受け「The Island Arc」を刊行しており、オンラインでの閲覧（地質学会ホームページ、トップ画面の<The Island Arc>から入れます）、電子投稿なども可能となっている。また、国立情報科学研究所の電子図書館サービス（NACSIS-ELS）で、地質学雑誌・地質学論集・地質学会Newsがいずれも1巻1号から、講演要旨集は1970年以降から閲覧が可能となっているが、十分には周知されていない（ホームページのトップから<地質学雑誌>に入り、<バックナンバー>からもNACSIS-ELSへ接続可能。ただし、登録手続きが必要）。地質学雑誌のオンライン化も検討されているが、財政的な問題や関連学協会との協力をこれまで以上にどのように進めるか、と言う点でも今後に残された課題は多い。

基本的な問題として、今回のシンポジウムでの基調としてあった、知的財産権や文化財としてのアーカイブ化の重要性と、一流国際誌との関係については、深刻な問題提起がなされている。つまり、これまで日本の多くの研究者にとって、一流国際雑誌へ投稿、掲載されることは、研究者の自己実現であり、そのことを目指して日夜努力している。しかし、今回のシンポジウムでは、そのこと自体に海

外への知的財産の流出や情報基盤の海外による支配という観点から警鐘をならし、日本としてのナショナルブランドの確立の必要性が強調されたという問題である。漠然とそうした問題を感じてきた研究者はいたかもしれないが、地質学会としても真剣に問題を受け止め、検討して行かなければならないと思う。年々、一流国際誌への日本人による論文掲載率が上昇しつつある一方、国産欧文誌への投稿が減少し続けているという現象が共通して進行していることが、幾つかの例で示されたことは上に紹介した。物理関係の学会が共同して国際的第三極の形成を目指して新たな電子ジャーナルを創設した経緯などを十分に学ぶ必要がある。

これらの問題と関連して、インパクトファクターに関する問題点が多く、演者から指摘されたことも印象的であった。しかし、現実問題としては評価を行う際に手間暇をかけて、1つ1つの論文の内容にまで立ち入った正当な評価を行うことの困難性を考えると、解決の道はなお遠い。今回のシンポジウムの決議3)の提言のなかでは、インパクトファクターに関する問題は以下の様にまとめられている。「わが国で生産される科学技術論文の海外流出を加速させている重要な要因に、論文誌のインパクトファクターを・・・個別論文の評価に安直に流用する誤りは、つとに指摘されている。各種業績評価は成果の内容・質そのものを、評価の目的に即して個別に正当に問うことにより行うという気風を浸透する必要がある。正しい評価のためには、安易な数値化や非本質的な形式的評価を廃し、人、時間、資金を投入して行うことが必要である。これらの気風の醸成が、わが国からの情報発信を強化するための一見迂遠ながらもっとも着実な基盤整備となる」

日本地質学会は既に欧文誌の「The Island Arc」を刊行しており、関係者の努力によりその評価が高まりつつある。また、アジアを念頭においた編集方針が貫かれているという点でも、今回のシンポジウムの中での1つの力点「アジアの中の日本」という点に関しては先進的な役割を果たしていると思う。しかし、今回のシンポジウムの2、3の講演の中で紹介された国産の総合科学誌構想の中では、自然科学関係は、物理・化学・生物・数学分野は挙げられていたものの、地球科学分野は入っていなかった。今後、地球科学界全体として『SPARC/JAPAN』や『J-STAGE』との関わりを深めて行くよう努力する必要がある。

最後に、今後の高度な情報社会への発展の中で、学会情報（学術誌の内容も含めて）に鍵をかけて良いのか、情報公開をどの様に考えるのかといった問題は、新たな問題であり、学協会全体の動向を見つつ、今後考えて行かなければいけない問題となろう。

## 国立情報学研究所の電子図書館をご利用下さい

～地質学雑誌第1号から無料閲覧できます～

インターネット（電子図書館<http://els.nii.ac.jp/>）で、地質学雑誌（2003年11月号まで）、地質学論集（2000年、no.57まで）、ニュース誌（2003年12月号まで）、講演要旨集（1999年分まで）が第1号から無料閲覧できます。これで、ご家庭の蔵書・スペース問題は一挙に解決です。ただし、地質学論集は会員でも有料です。アイランドアーク誌はBlackwell社に著作権がありますので、このサービスの対象となっていません。利用可能な対象は毎年1年ずつ新しくなります。

利用するためには利用申請（登録）が必要となります。上記URLへ入り、利用申請についての説明（登録要項、記入例、研究分野一覧表など）を参考に申込書を書いて、下記宛に申し込めば、1～2週間でIDとパスワードが送られてくることになっています。地質学会発行の雑誌等の無料閲覧には所属学会の会員証明が必要です。非会員は有料となります。学会事務所へ申し込んでいただければ、学会の会員証明を済ませた利用申込用紙をお送りいたします。利用登録をしなくても、題目と著者名までは閲覧が可能です。

利用申込み用紙送付先：

〒101-8430 東京都千代田区一ツ橋2-2-1 国立情報学研究所開発・事業部企画調整課 共同利用係 宛

(日本地質学会総務委員会)





## ご案内

国会以外の学会および研究会・委員会よりの催し物のご案内を掲載します。

### 平成16年度 第1回 建設技術者のための地質学教養セミナー :「地球の過去・現在・未来」

主催：断層研究資料センター  
後援（予定）：日本応用地質学会関西支部・(社)地盤工学会関西支部・関西地質調査業協会・(社)建設コンサルタント協会近畿支部

本年度からは、下記のように、建設技術者のために必要な地質学の基礎として、地質学教養セミナーの開催を計画しております。これは、科学・技術の進歩が速い今日、ともすれば専門領域の情報のみに明け暮れる傾向がみえることから、広い視野から地球という自然を考える機会を設け、いわばシニア向けの教養講座（セミナー）としての位置づけを目指しております。

開催日：2004年6月7日（月）  
13:00～17:00  
会場：建設交流館 8F グリーンホール  
TEL：06-6543-2551  
定員：200名  
参加費：4,000円（資料代含む）  
申し込み：事前申し込み不要。参加費は当日

会場でお支払い下さい。

### プログラム 「地球の過去・現在・未来」

1. 大量絶滅の科学  
磯崎行雄（東京大学大学院 教授）
2. 地球は火山がつくった  
鎌田浩毅（京都大学大学院 教授）

なお、当センターのセミナーは技術士CPD（継続教育）に履修実績として申請をすることができます。当日受付で申し出て下さい。

連絡先：断層研究資料センター  
電話・FAX 06-6532-6218  
E-mail: fred\_c@orange.livedoor.com

## 各賞・研究助成



日本地質学会に寄せられた候補者の推薦依頼をご案内いたします。推薦ご希望の方は締切日半月前までに、執行委員会までお申し込み下さい。

### 2004年度 地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者募集

2003年度地球化学研究協会学術賞「三宅賞」および「奨励賞」候補者を募集します。学会としてのご推薦または、個人会員からのご推薦のいずれからでもお受けします。学会員へのお知らせをよろしくお願い致します。下記の要領でご応募下さい。応募用紙などは学会事務局宛て別途送付してあります。

1. 三宅賞  
対象：地球化学に顕著な業績をおさめた

研究者  
表彰内容：賞状、副賞として賞金30万円、毎年1件（1名）  
2. 奨励賞  
対象：推薦締切日に35才以下で、地球化学の進歩に優れた業績を挙げ、将来の発展が期待される研究者  
表彰内容：1件10万円、毎年1件（1名）  
3. 応募方法：所定の用紙に略歴、研究業績、推薦理由などを記入し、下記のあて先へご送付下さい。  
4. 締切日：2004年8月31日（火）  
5. 応募先：地球化学研究協会  
〒166-0002 東京都杉並区高円寺北4-29-2-217  
電話 03-3330-2455（FAX兼用）  
なお、応募用紙は、t-sagi@ka5.koalernet.ne.jp宛てご請求頂ければ送付いたします。

### トヨタ財団 2004（平成16）年度研究助成

トヨタ財団では、「多元価値社会の創造」を基本テーマとして、研究助成を行います。助成予定額：2億円  
公募期間：2004年4月1日（木）～5月20日（木）  
応募方法：専用の申請用紙に必要事項を記入の上、財団事務局までお送り下さい。FAXやe-mailによる応募は受け付けません。申請書は、財団事務局または、HP（<http://www.toyotafound.or.jp>）から入手して下さい。  
応募締切：2004年5月20日（木）当日消印有効  
申請用紙申込み・応募先  
〒163-0437 新宿区西新宿2-1-1新宿三井ビル 37F 私書箱236号  
（財）トヨタ財団 研究助成係  
電話03-3344-1701

公募 三 教官公募等の求人ニュース原稿につきましては、採用結果をお知らせいただけますようお願い致します。



### 公募結果

九州大学大学院理学研究院地球惑星科学部門固体地球惑星科学講座担当教授  
寅丸敦志氏（平成16年4月1日着任）

熊本大学理学部地球科学科地球変遷学講座教授  
吉朝 朗氏（大阪大学理学研究科より平成16年4月1日着任）

### 大阪工業大学教員公募

所属：工学部一般教育科  
専攻分野：地球科学  
職名および人員：講師または助教授 1名  
採用時期：2005年4月1日  
応募資格：  
(イ) 35歳位まで  
(ロ) 博士の学位を有すること（取得見込みも可）  
(ハ) 「地球科学a, b」および地球科学関連科目（共通科目および教職課程科目）。さらに物理実験（工学部専門基礎科目）を担当できる方。  
応募書類：

- (1) 履歴書（本学所定の用紙による）
  - (2) 業績書（本学所定の様式による）
  - (3) 著書・論文（主要なもの3点以内、コピー可）
  - (4) レポート（下記の通り）1000字以内、A4版1枚。様式任意。テーマは下記のいずれかを選択のこと。
    - ・「教育を充実させるために実践してきた具体的事項」
    - ・「就任後の教育に対する抱負」
  - (5) 健康診断書（本学所定の様式または診断項目を充足している国公私立病院等が発行したもの）
- \*履歴書および業績書については、本学所定の様式以外のは受け付けできません。  
\*応募書類は原則として返却いたしません。



受付期限：2004年5月14日（金）必着

書類の送付先：

〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1

大阪工業大学事務部庶務課

\*応募書類は封筒の表に「一般教育科教員  
公募関係」と朱書きし、郵送の場合は書  
留として下さい。

問合せ先・用紙請求先：

〒535-8585 大阪市旭区大宮5-16-1

大阪工業大学事務部庶務課

電話 06-6954-4097（ダイヤルイン）

ご質問は電子メールでもお受けします

shomu@ofc.oit.ac.jp

## 東洋大学教員公募

1. 所属学部・学科：経済学部経済学科  
2. 担当科目：「地球の科学」、「エネルギーの科学」（一般教養）及び「統計学入門」または「経済数学」「ゼミナール1」（学部）地学系の教養科目として文系の学生に地球規模での岩石、水、大気およびエネルギーの循環を扱い、また、それぞれにおける環境問題について研究業績があり講義担当ができること。「統計学入門」または「経済数学」を担当できること。実験施設を必要としない者。

3. 職名：講師，助教授，教授

4. 勤務地：白山校舎 第1部，第2部

5. 勤務条件：定年：満65才

6. 応募資格：

(1) 大学院博士課程（後期課程）の単位修得者，または平成17年3月31日までに単位修得見込みの者。(2) (1)と同等以上の研究業績を有する者。(3) 国籍は不問（但し，外国人の場合は日本語による講義のできる者）

7. 採用予定日：平成17年4月1日

8. 応募メ切：

平成16年5月14日（金）午後5時 必着

9. 提出書類・業績：

(1) 履歴書（別添様式1のA4判に準じて，写真添付・学歴・学位等を明記したもの）1部とコピー2部 (2) 研究業績書（別添様式2-1のA4判に準じて，著書・論文・翻訳書・学会発表，その他に分類し発表年月順に記載すること）3部（コピー可）(3) 主要な著書または論文，計3セット（抜き刷り・コピー可），または別添様式3のA4判に準じたりストを3部つけること。(4) 「地球の科学」または「エネルギーの科学」および「統計学入門」または「経済数学」担当科目の教育に対する抱負をA4判各2000字程度で記入し3部（コピー可）。

\*選考の段階で成績（単位修得）証明書・健康診断書の提出をいただく場合がありますので，予め御承知おきください。

10. 選考方法：

1次審査-書類・業績審査・面接（日本語）を実施する場合があります。2次審査-プレゼンテーション（実施日は平成16年7月8日（木）または7月15日（木）を予定しています。詳細は1次審査終了後（7月1日予定），該当者宛てに連絡いたします。

11. 提出書類：

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

東洋大学 経済学部研究室事務室

電話 03-3945-7411

\*封筒の表に「地球の科学，統計学入門応募書類在中」と朱記し，書留便にて送付してください。

## 核燃料サイクル開発機構平成16年度任期付研究員（博士研究員）の追加公募

1. 募集人員 2名

2. 研究分野

高速増殖炉開発及びそれに関連する核燃料サイクル技術開発，高レベル放射性廃棄物処分基盤研究，放射線安全研究分野等で核燃料サイクル開発機構の業務として実施可能な研究

3. 応募資格

採用時に原則として35歳以下の方で博士号取得者（採用時に取得見込みを含む）であり，かつ健康な方であって，研究を自主的，主体的に遂行する意志のある方

4. 契約開始日 2004年8月1日（予定）

5. 待遇等

謝金：月額50万円程度社会保険料及び税込み）

研究諸雑費：100万円程度/年

通勤手当，住居手当は，職員に準じて別に支給

なお，必要に応じて外部の研究機関においても，1年間に2ヶ月を限度として研究を行うことができます。

6. 研究期間

8ヶ月以内。ただし，年度毎に所要の評価を行い，研究期間の更新は最大2回まで可能。

7. 審査方法

書類審査，面接審査及び健康診断。

8. 応募締切 2004年6月25日（金）【必着】

9. その他

平成17年度には核燃料サイクル開発機構は日本原子力研究所と統合する予定であり，平成17年度以降の研究については，変更になる場合があります。

10. 問い合わせ先

核燃料サイクル開発機構

技術展開部 技術協力課 亀田，石沢，田沼

電話 029-282-1122

（内線41111，41127，41126）

FAX 029-282-7980

E-mail daigaku@jnc.go.jp

サイクル機構ホームページ（<http://www.jnc.go.jp/>）



環境と地質環境」が発売になりました。

A2版裏表カラー印刷，ハンディタイプでさらにポスターにもなります。

## ☆リーフレットシリーズ・3 好評発売中！！

### 『大地をめぐる水—水環境と地質環境—』

第1作「大地の動きを知ろう—地盤・活断層・地震災害—」，  
第2作「大地のいたみを感じよう—地質汚染Geo-Pollutions—」  
に引き続きリーフレットシリーズ第3作「大地をめぐる水—水

ご希望の方は以下の要領でお申込下さい。

会員価格300円 非会員価格400円

申込方法：学会事務局宛に，希望部数を記入し，返信封筒（切手貼付のこと）を入れてお申し込み下さい。

※少部数の場合は，代金は切手で同封可。

なお，サイズが横15cm・縦21cm，重さ25g/部ですので，郵送につきましては，以下のようにお願いします。

定型封筒の場合：90円切手貼付。ただし，二つ折りにしての郵送となります。

定型外（15cm×21cm以上）封筒の場合：130円切手を貼付。

## 出版物在庫案内

ご希望の方は代金を添えて本会事務局宛お申込みください。なお、2冊以上のお申込みにつきましては送料をお問い合わせください。

現金書留または郵便振替 00140-8-28067

No. 38以前の論集：院生・学生は4割引，正会員は2割引 No. 40以降の論集：院生・学生のみ2割引

### 地質学論集

- 第21号 続・日本列島の基盤. 加納 博ほか編, 331pp., 1982年4月刊, 会員頒価2,400円, 〒340円
- 第26号 白亜系の国際対比—現状と問題. 平野弘道編, 172pp., 1985年3月刊, 会員頒価2,000円, 〒290円
- 第30号 日本の第四紀層の層序区分とその国際対比. 市原 実ほか編, 221pp., 1988年4月刊, 会員頒価2,000円, 〒340円
- 第33号 西南日本内帯高圧変成帯とテクトニクス. 西村祐二郎ほか編, 357pp., 1989年4月刊, 会員頒価3,000円, 〒340円
- 第34号 堆積盆地と褶曲構造—形成機構とその実験的研究—. 三梨 ほか編, 209pp., 1990年3月刊, 会員頒価2,500円, 〒340円
- 第37号 古日本海東縁の新第三系—層序・古地理・古環境. 小林巖雄ほか編, 326pp., 1992年3月刊, 会員頒価3,000円, 〒340円
- 第38号 変動帯における砕岩類の組成と起源—日本列島を例として—. 君波和雄ほか編, 401pp., 1992年3月刊, 会員頒価3,500円, 〒340円
- 第40号 中央構造線のネオテクトニクス—その意義と問題点—. 岡田篤正ほか編, 250pp., 1992年12月刊, 会員頒価3,200円, 〒340円
- 第41号 中部九州後期新生代の地溝. 長谷義隆ほか編, 192pp., 1993年6月刊, 会員頒価3,100円, 〒290円
- 第42号 西南日本の地殻形成と改変. 小松正幸ほか編, 357pp., 1993年4月刊, 会員頒価3,100円, 〒340円
- 第43号 浅部マグマ溜りとその周辺現象の地球科学. 村岡洋文ほか編, 177pp., 1994年4月刊, 会員頒価2,000円, 〒340円
- 第44号 島弧火山岩の時空変遷. 周藤賢治ほか編, 335pp., 1995年11月刊, 会員頒価2,800円, 〒340円
- 第45号 ~~シーケンス層序学—新しい地層観を指して. 斎藤文紀ほか編, 249pp., 1995年8月刊, 会員頒価2,500円, 〒340円 (売り切れしました)~~
- 第46号 火山活動のモデル化. 佐藤博明ほか編, 162pp., 1996年9月刊, 会員頒価1,900円, 〒290円
- 第47号 日高地殻—マントル系のマグマ活動. 荒井章司ほか編, 323pp., 1997年4月刊, 会員頒価3,000円, 〒340円
- 第48号 Cretaceous Environmental Change in East and South Asia (IGCP350) Contributions from Japan— 岡田博有ほか編, 188pp., 1997年6月刊, 会員頒価2,100円, 〒340円
- 第49号 21世紀を担う地質学. 新妻信明ほか編, 232pp., 1998年3月刊, 会員頒価2,500円, 〒340円
- 第50号 構造地質—特別号—21世紀の構造地質学にむけて—. 狩野謙一ほか編, 263pp., 1998年7月刊, 会員頒価2,500円, 〒340円
- 第51号 地震と地盤災害—1995年兵庫県南部地震の教訓—. 岡田博有ほか編, 162pp., 1998年3月刊, 会員頒価3,000円, 〒340円
- 第52号 オフィオライトと付加体テクトニクス. 宮下純夫ほか編, 316pp., カラー10pp., 1999年9月刊, 会員頒価3,000円, 〒340円
- 第53号 本州弧下部地殻と珪長質マグマの生成・活動システム. 加々美寛雄ほか編, 401pp., 1999年11月刊, 会員頒価3,900円, 〒450円.
- 第54号 タフォノミーと堆積過程—化石層からの情報解読—小笠原憲四郎ほか編, 197pp., 1999年12月刊, 会員頒価2,900円, 〒340円. (入荷しました)
- 第55号 ~~ジュラ紀付加体の起源と形成過程. 木村克己ほか編, 221pp., 2000年1月刊, 会員頒価2,800円, 〒340円. (売り切れしました)~~
- 第56号 古領家帯と黒瀬川帯の構成要素と改変過程. 高木秀雄ほか編, 253pp., 2000年3月刊, 会員頒価2,900円, 〒340円.
- 第57号 砕岩層組成と堆積・造構環境. 公文富士夫ほか編, 240pp., 2000年9月刊, 会員頒価2,800円, 〒340円.

### リーフレットシリーズ

- 大地の動きを知ろう—地震・活断層・地震災害— 1995年4月発行 会員価格200円 (非会員300円)
- 大地のいたみを感じよう—地質汚染Geo-Pollutions 1997年2月発行 会員価格200円 (非会員300円)
- 大地をめぐる水—水環境と地質環境— 2001年5月発行 会員価格300円 (非会員400円)

下敷き：「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」(英語版) 1枚200円 (非会員300円)

### 講演要旨集ほか

- 第109年学術大会講演要旨集 (2002年9月刊, 新潟) 会員頒価3,500円, 〒500円
- 第110年学術大会講演要旨集 (2003年9月刊, 静岡) 会員頒価3,500円, 〒500円
- 第110年見学旅行案内書 (2003年9月刊, 静岡) 会員頒価1,500円, 〒350円  
(静岡大会セット購入の場合送料実費請求)

クリアファイル：学会オリジナル、A4版透明タイプ 会員頒価 1枚100円

# CALENDAR

2004.4～

地球科学分野に関する研究会、学会、国際会議、などの開催日、会合名、開催学会、開催場所をご案内致します。会員の皆様の情報をお待ちしています。

☆印は、日本地質学会行事。

## 5月 May

### ○地球惑星科学関連学会合同大会 2004年合同大会

5月9日(日)～13日(木)

会場：幕張メッセ 国際会議場

<http://www.eps.jp/jmoo2004/main.html>

### ☆日本地質学会関東支部2004年総会・講演会

講演会「阪神淡路大震災から10年、地震学・地震地質学・耐震工学の到達点」

5月15日(土) 13:00～17:00

場所：北とびあ(東京都北区王子)

<http://www.geosociety.jp>

### ○平成16年度(社)砂防学会総会・研究発表会

5月18日(火)～20日(木)

場所：宮崎観光ホテル

<http://www.jsce.or.jp/event/conf/2004/index.html>

### ○残土石処分地・廃棄物最終処分場にかかわる地質汚染調査浄化技術の研修会

5月26日(水)～5月29日(土)

会場：潮来ホテル(JR潮来駅前)

<http://homepage1.nifty.com/npo-geopol/>

### ○第42回原子力総合シンポジウム

5月27日(木)～28日(金)

会場：千代田区立内幸町ホール(東京都千代田区内幸町1-5-1)

問合せ先：(社)日本原子力学会内 原子力総合シンポジウム運営委員会事務局

電話 (03) 3508-1261,

E-mail: atom@aesj.or.jp

### ○第48回日本水環境学会セミナー・バイオマスの利用・活用と水環境

5月28日(金)

場所：早稲田大学理工学部55号館大会議

<http://www.jswe.or.jp/index-j.html>

### ○日本地下水学会2004年春季講演会

5月29日(土)

場所：千葉大学

<http://www.groundwater.jp/jagh/home.htm>

### ☆日本地質学会北海道支部総会・例会およびシンポジウム

5月29日(土)～30日(日)

場所：北海道教育大学旭川校

<http://www.geosociety.jp>

## 6月 June

### ☆近畿支部・西日本支部・四国支部合同例会

6月5日(土)～6日(日)

場所：京都大学理学部6号館

<http://www.geosociety.jp>

### ○地質学史懇話会例会

6月12日(土) 13:30～17:00

会場：北とびあ(東京・王子)

<http://www.geocities.com/jahigeo/jahigeo51.html>

### ☆日本地質学会中部支部・年会

6月12日(土)～13日(日)

12日：総会・シンポジウム「日本海と本州弧の形成・発展」懇親会

13日：地質巡検

会場：富山大学理学部

<http://www.geosociety.jp>

### ○資源地質学会第54回年会

6月15日(火)～17日(木)

会場：東京大学山上会館

<http://www.kt.rim.or.jp/~srg/>

15日：シンポジウム「Intrusion Related Mineral Resources in East Asia」

### ○石油技術協会平成16年度春季講演会

6月16日(水)～17日(木)

場所：札幌市

<http://www.japt.org/>

### ○第15回日本情報地質学会総会・講演会

GEOINFORUM-2004

6月24日(木)～25日(金)

会場：大阪市立大学学術情報総合センター

<http://www.jsgi.org/>

## 7月 July

### ○第41回理工学における同位元素・放射線研究発表会

7月7日(水)～9日(金)

会場：日本青年館(新宿区霞岳町15番地)

<http://www.jrias.or.jp/>

### ○第39回地盤工学研究発表会

7月7日(水)～9日(金)

会場：朱鷺メッセ(新潟コンベンションセンター)

<http://www.jiban.or.jp/>

### ○19th Himalaya-Karakorum-Tibet Workshop

7月10～12日

場所：北海道ニセコ・ニセコ東山プリンスホテル

<http://www.ep.sci.hokudai.ac.jp/~arita/HKT/index.html>

### ○第10回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会

7月14日(水)～16日(金)

場所：大阪国際交流センター

<http://www.groundwater.jp/jagh/home.htm>

## 8月 August

### ○地学団体研究会総会2004

8月6日(金)～8日(日)

場所：埼玉県川越市

<http://www.soc.nii.ac.jp/agcj/index.html>

### ○日本地学教育学会第58回全国大会

8月20日(金)～22日(日)

場所：岡山理科大学

<http://www.soc.nii.ac.jp/jsese/031020/031020-okayama-taikai.htm>

### ○The 32nd International Geological Congress 2004 (IGC)

8月20日(金)～28日(土)

場所：Florence, Italy

<http://www.32igc.org/home.htm>

## 9月 September

### ☆日本地質学会第111年総会・年会

9月18日(土)～20日(月)

場所：千葉大学

<http://www.geosociety.jp>

## 10月 October

### ○日本地震学会秋季大会

10月9日(土)～11日(日)

場所：九州大学

<http://www.soc.nii.ac.jp/ssj/index.html>

## 11月 November

### ○TECNO-OCEAN 2004 IN KOBE

11月9日(火)～12日(金)

場所：神戸コンベンションセンター(神戸市)

<http://www.oceans-technocean2004.com/>

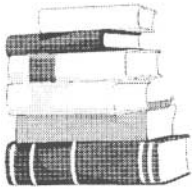
### ○2004年世界アスベスト東京会議

11月19日(金)～21日(日)

場所：東京・早稲田大学国際会議場

<http://park3.wakwak.com/~gac2004>

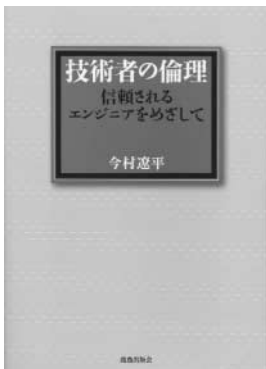




## 紹介

### 技術者の倫理：信頼されるエンジニアをめざして

今村遼平 著



鹿島出版会，2003年12月10日発行，  
サイズ：210×148，183pp.  
ISBN:4-30602-364-8，本体価格2,500円

本書は、題名のとおり信頼される技術者をめざすために必要な「技術者の倫理」をエンジニアである著者の視点からまとめられている。日本の社会では、これまで「技術とは何か」という技術者として最も根本的なこと、つまり、「技術者の倫理に関する教育」がなごりにされてきたことを指摘している。私は、企業に勤務する技術者として先輩たちからOJT (On the Job Training) をとおして技術を学んだ。だが倫理という視点では本人の意識も低いこともあって、先輩の背中を見て身に付けることができなかった。この著書から改めて勉強したといったほうが正しいだろう。本書を通読して、著者が技術者の倫理に危機感を持ちこれではいけないとの情熱が伝わってきた。それは、著者がエンジニアとしての生き方とこれからのあり方を踏まえて、信頼されることをめざし、実践していることから生まれていると感じた。

本書の内容は、この10数年ほどの間に倫理観の欠如した無節操な不祥事を題材にその背景と共通した原因などがわかりやすく解説されている。その記述も難しさを感じさせないように図表が挿入され、箇条書きと重要な内容は強調文字にまとめられている。図表は、著者の見方が反映された14の原因が入っており、技術者の倫理を体系化しようとの試みを

感じさせる。中でも「企業倫理」の「図-9 企業の非倫理的行為を生む、アンハッピーサイクル」と「図-10 倫理喪失と不祥事発生の構造」は、社会的背景と組織からの影響及び個人の倫理喪失のプロセスが分析的にまとめられている。各章の内容は、倫理関係の新聞記事が掲載されているので、具体的事例を参照しながら内容の理解を深めることができる。新聞に掲載された技術者の倫理に関する主要なものは、ほとんど掲載されていると言ってよい。これは、倫理に関する問題を身近に感じさせ、実際の事例からどのように倫理を考えればよいかを理解しやすい、用語についても丁寧な解説が注または網掛けで紹介され、読むだけでなく自分で考えるのに役立つ。本書はⅢ章からなり、その構成はつぎのようである。

- 第Ⅰ章 個人の倫理
- 第Ⅱ章 企業倫理
- 第Ⅲ章 環境倫理
- 引用・参考文献
- 付録 倫理要綱の比較／索引

第Ⅰ章「個人の倫理」は、19の事項が解説されている。「1. 倫理とは何か」の解説からはじまり、技術者個人に必要な倫理に関する事項が見事に整理されている。私自身も「4. 技術者の責任」、「5. 技術者はなぜ倫理観がなければならないか」、「6. 倫理的な行動とは」を通して、技術者としての自らの責任ある行動規範をどのように考えたらよいかについて再認識した内容が多く、大変参考になった。特に、著者のいう技術者にとっての倫理は、日々実践する業務のなかで「倫理的に考え・判断し・行動する」実学→行動学でなければ、意味がないこと。そして、倫理的行動とは「自分の頭で考え、自分で判断し、そして行動した結果に自己責任を持つこと」を強く再確認した。倫理の問題は、技術者個人の自覚がなくては防ぐことができない。本章は技術者のプロをめざす学生と現在技術者の若い方々には必須の内容といえるだろう。

第Ⅱ章「企業倫理」は、18の事項が解説されている。技術者の多くは組織・企業の一員として活躍している。企業のとる行動は、常に社会的に正当化されたものでなければならない。ここ数年の企業の不祥事多発事例から、社会一般の人々の企業観とその変化、企業倫理の変化、企業の社会的責任、企業活動における誠実性などが整理されている。企業における個人倫理と組織倫理の解説の他に不祥事発生の構造／企業内での倫理的対話のあり方／管理部門から見た企業倫理／新しい倫理観確立のための仕組み／企業の行動規範試案／独占禁止法／セクシャル・ハラスメント／製造物責任法／政治献金のあり方／インサイダー情報とインサイダー取引規制／新民事訴訟法を念頭にいた文書管理の必要性／企業力をカサにきての無理じいは倫理違反／

などの見出し事項と内容は、著者が企業に長く籍を置いた経験を活かしている。さらに、「11. 企業の行動規範試案」は、著者の苦心の跡が読み取れ、これから行動規範を検討しようとする組織・企業にはおおいに参考になる。

第Ⅲ章「環境倫理」は、9の事項が解説されている。本学会の倫理綱領の4. 「地球環境への責務」にもあるように、専門家である会員は環境問題への取り組みが求められている。「1. 環境倫理の必要性」では、技術者が環境倫理を広汎な視点でとらえていく必要性を解説し、環境汚染／地球環境問題とその対応／持続可能な開発／「環境倫理学」の三つの主張／人間としての謙虚さの必要性／「種」としての倫理／技術者として環境倫理をどう考えていけばいいか／が整理されている。Ⅰ章とⅡ章に比べて頁数は少ないが、技術者に必要な重要事項がコンパクトにまとめられている。

引用・参考文献、付録「倫理綱領の比較」および索引は、読者にとって便利である。特に、倫理綱領の比較では全米プロフェッショナル・エンジニア協会とアメリカ土木技術者協会の倫理規定が比較できるように整理され、倫理の具体的な内容がわかりやすく参考になる。

技術者の倫理不在または欠如からくる技術的問題や不祥事がこうも頻発すると技術者が技術倫理の何たるかをきちんと学び、それらを日常の業務に活かしていくことが急務となっている。著者は、建設コンサルタントが真に社会の信頼を得て広く世の中に認知されるためには、技術者として高い倫理観をもっていることが重要な要素であると強調している。地質学会も倫理綱領をつくり倫理観の育成と倫理教育にとりくんでいる。さらに、科学技術基本計画や日本技術者教育認定機構(JABEE)の教育要求水準、あるいは技術士資格の国際認定(APEC Engineer)の面でも、倫理教育が要件としてとりあげられている。それに、2001年からは技術士第1次試験では、技術者の倫理問題を問う「適性科目」が必須科目とされた。

本書は現在建設業や建設関連業の技術者とこれから技術者をめざす学生にぜひ一読をおすすめしたい。また、企業や組織内での技術倫理研修や理工系大学における倫理教育の教材に推薦する。

(足立勝治)

## オラビ瀨の洞門

西山忠男 著



権歌（とうか）書房，2003年1月1日発行，B6判ハードカバー419頁，ISBN 4-88757-064-3，本体価格1,800円＋税

小説は著者の文才のなせる技であるが、また著者の情念の表現でもある。学生時代に同じゼミで議論し合い、その後も学会などで度々会って世間的な付き合いをしている同業者の情念の世界に踏み込むことは、非常に気が重く、ためらいを感じるものである。私がこの小説を著者から受け取った時は、そういう気持ちでページをめくりながら、登場人物の断片的な記述を読んで、ああ、これはあの大学のあの先生のことだ、これは我々の指導教官だった先生のことだ、これは彼の後輩の誰君と誰君のことだ、などつまみ読みするだけで、この小説の中に立ち入って著者の情念の世界を共有しようという気にはならなかった。この本を受け取った知人たちの反応を見ても、多分皆同じような気持ちだったのではないと思われる。この本のカバーの表には、曇り空の穏やかな海にぽっかりと口をあけるオラビ瀨の洞門と、そこへ読者を誘い込むように明るい黄緑色の可憐な花をつけたアオモジの一枝が描かれている。そしてその裏には、地球からは見えないはずの面をこちらに向けた満月の下、漆黒の闇の中でその洞門だけが不思議な光を背に不気味なシルエットを現している。本棚の隅に置かれたこの紫色の洞門の本がだんだん気になってきて、この本には本当は何が書かれているのだろうかという疑念が強まり、ついに1年後、意を決して一字一字著者の情念の世界に入っていった。私にはこの小説の文学的な批評をする能力はなく、浅薄な一読者の感想文の域を出ないが、現役の地質学者が綴った人間の魂の世界を是非多くの人に体験してもらいたいと思ひ、この紹介文を記す。

この小説が出版される3ヶ月前に石黒耀の「死都日本」（講談社）という長編小説が出た。「死都日本」は南九州のカルデラ火山の破局

的噴火によって日本が壊滅状態に陥る様子を描いたもので、小説の中では何十万人もの人が命を落とし、日本が死都と化してしまうにもかかわらず、登場人物は黒木助教授も岩切記者も菅原首相も皆アツケラカンとして底抜けに明るい。「死都日本」が多くの人に読まれ、火山学者から高い評価を受け、政府の役人まで出席する死都日本シンポジウムが開かれるほどポピュラーになったのは、破局噴火が実際に何回も過去の日本で発生している今後も発生する可能性があるという危機感だけではなく、「死都日本」を非常に読みやすい小説にしている登場人物の明るさも一因であろう。それに対して本書は「人は誰しもその内部に地獄に連なっているかもしれない底知れぬ暗闇を養っている」（p.234）という人間観で貫かれている。主な登場人物はみな負の歴史の遺産を背負っており、自分自身や自分の血縁に連なる者を守るためにウソをつき、私利をはかるために様々な策略をめぐらし、一つの事件を自分たちに有利な、自分たちを正当化する伝説として継承していく。そしてそうした世界に対しては余所者であったはずの主人公までが、最後はその連鎖の中に自ら飛び込み、深い洞門の中へ入り込んでいく……。

この小説の主人公は、恐らく著者が若い頃幸福な学生生活を送ったであろう街に因んで金沢祥一と名づけられている。彼はある大学の構造地質関係の白髪で攻撃的な性格の教授（私には顔が思い浮かぶ）の研究室の卒論生で、長崎県の変成岩地域の地質構造を研究課題として与えられる。調査をはじめて数日後に、彼はオラビ瀨の洞門である女性の死の現場に遭遇してしまう。それがもたらした彼のその地域に足を踏み入れる気がなくなり、卒論の調査は非常に不完全なものになってしまっただけで、大学院への進学は閉ざされる。彼は教授の計らいで地質コンサルタント会社に就職するが、下積みの仕事の繰り返しと周囲の俗物的な人間たちの中で次第に自分の現状への不満を募らせる。そんな時、卒論調査の時に偶然手に入れて保存してあった、洞門で死んだ女性のノートを、卒業の10年後に初めて読む。その女性は主人公より5歳ほど年上で、この地域で江戸時代の初めに行なわれた切支丹弾圧を卒論のテーマとして現地調査していた文学部の学生だったのだ。そして調査を進めるうちに彼女自身が350年前の切支丹弾圧によってオラビ瀨の洞門で磔（はりつけ）になって殺された女の子孫であることを知り、自分をその女の生まれ代わりと思うようになった。そしてその女が葬られている聖なる山の頂きで洞門近くの村の青年と運命的な出会いをしたところまでがノートに綴られていた。その後彼女とその青年は結婚したが、その青年は漁に出て亡くなってしまい、彼女も白衣を纏（まと）って自らオラビ瀨の洞門に船を進め、命を落とす。それが、主人公が卒論調査のはじめに目撃した彼女の死の現場だった。主人公は、政府の地質関係の役人（こ

の人も顔が思い浮かぶ）を接待する会社の宴会で無理に裸踊りをさせられた屈辱的な体験を機に会社を辞め、それまで一度も再訪したことがなかった卒論のフィールドに戻る。そして彼女の実家の墓から彼女の骨壺を盗み出し、オラビ瀨がよく見える聖なる山に葬ったあと、自らもオラビ瀨の洞門に向かう……。

この本の帯に印刷されているキャッチフレーズは「洞門にすべてがある」「隠れ切支丹の村になお息づく伝説」「その伝説の魔力に魅入られた若者の孤独な愛の物語」である。この本には走向傾斜を測る場面や、泥質片岩、紅簾片岩、蛇紋岩、大理石、玄武岩岩脈、安山岩溶岩円頂丘、石英脈、金鉱山、海食洞、鍾乳洞、ダム軸を通る断層、地滑りなど、地質学的な記述が多々あり（不思議なことにヒスイの話は全く出てこない。白衣の女性がヒスイの化身なのだろうか）、地質教室のゼミやコンサル会社の仕事の様子も描かれているが、「日本沈没」や「死都日本」のような、学界の外の人間が書いた地球科学的啓蒙小説とは全く違う。現役の地質学の大学教授が、自分自身の体験や見聞に基づく地質関係の大学や企業の人間模様を前景にして、数百年前の暗い歴史を経た土地で、その重い歴史を背負いながら血縁に縛られて生き、そして死んでいった人々の魂のおらび（叫び）を、そして無垢な卒論生が汚い現実の人間たちの世界を知り、そこから脱して清浄な愛の世界へ飛び込むまでの道程を、緻密なストーリー構成の中で見事に描ききった、ストイックな愛の物語である。決してとっつきやすい本ではないが、西海の半島に露出する結晶片岩の複雑な褶（ひだ）を一字一字辿りながら、人間の魂の奥底を歩く巡検に出かけてみては如何だろうか。なお、この本はインターネット上の紀伊国屋書店やYahooのイーエスブックでも購入できる。



（石渡 明）





## ミュージアムパーク茨城県自然博物館

Ibaraki Nature Museum

主席学芸主事 滝本秀夫

### ■館名とシンボルマークに込められた想い

当館は平成6年11月にオープンし、今年の11月で10周年を迎えます。今年の2月21日には450万人目の来館者を迎え、それを記念するセレモニーが行われました。交通が不便な茨城県の南西部にあつては驚異的とも思える数です。現在、博物館業界では、「博物館の評価」が話題に上っておりますが、いかに多くの人々に観ていただき愛されるかということが、評価の重要な尺度の一つであることは変わることがないでしょう。

みなさんは「ミュージアムパーク」という言葉にどんなことを連想されるでしょうか。従来の伝統的な博物館とは違った、新しい何かを感じていただけるのではないのでしょうか。また、博物館という建物だけでなく、野外施設としてのイメージも抱えていただけることでしょう。博物館の身近にいる人や利用頻度の高い学校の先生方からは、後に続く「茨城県自然博物館」を使うことなく、「ミュージアムパーク」という名称で呼ばれることが多いようです。この愛称で呼ばれるということも、実は一般の方々の身近にあるという意味で、大切なことではないかと思えます。

当館のシンボルマークはマンモス、半円形の大地、白鳥の翼から構成されています。マンモスは過去、大地は現在、白鳥の翼は未来を象徴するものとして描かれています。これは、「過去に学び、現在を識り、未来を測る」という当館の基本理念を表しています。

当館の展示室入り口で最初にお客様を迎えるのが、見上げるほど大きな松花江マンモスであること、当館隣にある菅生沼には冬になると200羽以上のコハクチョウが訪れることなどでから考案されたものです。

### ■常設展示

展示の全体がストーリーとして大きな流れの中で構成されています。宇宙のはじまり、地球の歴史、現在の自然、生物のしくみ、といった具合です。そして最後には今日的な課題としてさけることのできない環境問題についても取り扱っています。地質学的内容は主に地球の歴史の中で語られているわけですが、今日の自然をより正しく理解するためには過去を知ることが必要であるというスタンスになっています。

展示手法には大きな特徴が2つあります。参加体験型の展示を多く取り入れていること、そして随所に教育的な配慮をしているところです。見る事が中心になりがちな博物館の展示に「聞く」「触る」「匂いを嗅ぐ」といった感覚を取り入れることにより、より印象的な効果を上げています。また、小学校高学年から理解できるように配慮した説明、展示内容、豊富に用意された学習ソフトなどは学校団体の利用を大きく後押ししている要因になっていると思われます。

### ■野外施設

今日子ども達に不足していることの一つに「自然体験」があります。自然豊かなところに住んでいながらも、家の中で遊ぶことが多く、自然と触れあうことが少ないのが現状ではないでしょうか。当館は16.4haという広大な敷地に建てられ、野外には関東平野の原風景とでもいべき雑木林や谷津田の自然が残されています。また、本館の隣には県内最大の自然環境保全地域「菅生沼」があり、豊富な湿性植物や野鳥などに恵まれています。こうした自然を利用するにあたっては、季節ごとに動植物の観察ができるようにソフトが用意され、子どもから大人まで段階的に用意されたプログラムも整備されています。地学分野についても県内各地の岩石、化石資料が野外に置かれ、観察コースが設定されています。これにより、本館内で見えた展示を実際のフィールドで試すことが可能となります。

当館が野外で実施している地学分野の活動で特筆すべきことが2つあります。1つは、野外で化石を採集する体験がいつでもできるようなっていることです。茨城県内の工事などで見つかった第四紀の化石を土砂とともに運搬し採集用に提供しているのです。来館者は無料で貸し出しているシャベルで化石を採集し持ち帰ることができます。貝類が多いのはもちろんですが、ウニ、サンゴ、サメの歯などが見つかることもあり、こうなると大人でも夢中になっている様子が見られます。もうひとつは栃木県塩原町の岩石をハンマーやタガネで割り化石を見つける「化石のクリ



来場者でにぎわう水の広場



松花江マンモス



子どもたちに人気の白亜紀のジオラマ





博物館上空から（奥は管生沼）



管生沼のコハクチョウ

ーニング」体験です。この活動は当館のボランティアによるもので、その中心となっているのは塩原化石の専門家です。いずれの活動も化石を身近に感じ地球科学に触れる機会として効果的であると考えています。

### ■企画展

現在のところ、年間3回のペースで開催している企画展は、6割以上をリピーターが占める当館の、誘客要素の一つとなっています。基本的には動物・植物・地学の3研究室単位で企画していきますので、年に1つは地学分野中心の企画展があることとなります。数年前から準備を進めて開催される展示内容は自然史系の博物館としてはたいへん広い約1000m<sup>2</sup>の企画展室に展開され、見応え十分です。職員の間では、魅力的なテーマが常に関心事になっています。

また、今年2月には第3回市民コレクション展「化石掘りの魅力」を開催しました。化石コレクターの皆さんにご応募いただき、自慢の化石約250点を公開しました。3週間という短い期間でしたが、2万人を越える来館者がありました。

### ■教育活動

当館が非常に力を入れているのが教育活動です。組織としても教育課という部署に7名の学芸系職員が配置され、その企画運営にあっていますが、実践にあたっては他課の職員も動員し、館をあげて取り組んでいます。本館への来館者に対しては、年齢や目的に応じたソフトが豊富に用意されています。また、

団体での利用に際してはこれらのソフトを使用して効果的に利用するための相談を受ける窓口が設けられています。当館主催の普及活動は主に週末ごとに開催され、テーマによっては募集人数の10倍以上が応募してくることもあります。さらに積極的に外部に出ていく活動（アウトリーチ活動）では移動博物館、講師の派遣、教育的な資料の貸し出しなどが行われています。移動博物館はたいへん大がかりなもので、当館主催で学校を中心として行われるものと、市町村と共催で公民館などで行われるものがあります。

当館で現在力を入れているのは中高生への教育です。例えば化石に興味を持っている中高生が当館の学芸員とともにフィールド調査、クリーニング、同定、標本登録などを体験するものです。ジュニア学芸員制度と呼ばれるこの事業は今年で4年目を迎えます。

### ■調査研究

県内を4つの地域に分けて各地域の自然を3年で調べる総合調査、動物・植物・地学の研究室ごとに毎年のテーマを決めて行う分野別調査、個人的なテーマで研究を進める創造的研究の3つのカテゴリで実施しています。これらの研究成果は研究報告、総合調査報告書などとして出版され関係機関に配布されています。また、これらの調査研究の成果を企画展として分かりやすく展示し、一般の方々を紹介することにも心がけています。

### ■10周年記念事業

今年は開館10周年を記念して次のような催

しが予定されています。

- ・特別企画展「開館10周年記念 恐竜たちの足音がきこえる -中国 そして日本-」中国内蒙古自治区博物館との共催です。7月17日（土）～11月14日（日）
- ・10周年記念国際シンポジウム「市民とともに 自然とともに -新しい博物館像をさぐる」 11月14日（日）つくば国際会議場

### ■おわりに

日本地質学会の皆様も把握されているとおり、今日の「地学教育」については憂慮すべき事態が続いています。中学校での学習内容の削減、高校での履修率の低下などが深刻になってきている状況です。教育なしに将来の展望はありません。当館は様々な教育普及活動展示を通してその一端を担っていきたくと考えています。これまでも会員の皆様にはいろいろと御協力をいただきましたが、今後もよろしくお願いたします。

### ■利用案内

ミュージアムパーク茨城県自然博物館  
住所：〒306-0622 茨城県岩井市大崎700  
電話：0297-38-2000  
HP：<http://www.nat.pref.ibaraki.jp/>  
車利用の場合：常磐自動車道谷和原ICから20分  
鉄道・バスを利用の場合：東武野田線愛宕駅から茨城急行バス「岩井車庫行き」乗車、「自然博物館入り口」下車、徒歩10分  
休館日：毎週月曜日（その他臨時休館日もありますので事前にお確かめ下さい）



体験教室（化石のレプリカをつくろう）



自然観察会（ナウマンゾウをさがそう）



ジュニア学芸員のフィールド調査

### 博物館関係者の皆様へ

各博物館のご案内のほか、企画展、特別展・催し物の情報をお寄せ下さい。ご投稿をお待ちしています。お問い合わせは、[journal@geosociety.jp](mailto:journal@geosociety.jp)（ニュース誌編集委員会）まで。

## 第14回環境地質学シンポジウムの講演論文募集のお知らせ

環境地質研究委員会では、関係諸団体との共催で、今年は東京近郊にて11月下旬～12月上旬の2日間に下記のようにシンポジウムを開催します。

このシンポジウムは、環境地質に関する調査・研究に携わる方々から広く発表を募り、投稿された論文の内容から数セッションに分けてプログラムを組みます。講演時間は質問時間を含めて1題15分とし、各セッションの終わりには総合討論の時間をもうけ今後のその分野の研究の方向性などを議論してもらうようにしています。

地質学会会員・非会員を問わず、広く環境地質に携わる方々の積極的参加を期待しています。

なお、今回からは従来どおりの発表である「報告」に加えて、査読審査を行った発表である「論説」も合わせて募集します。それぞれ、申込み方法や締切日が異なりますので御注意ください。

期日：2004年11月下旬～12月上旬のうちの連続する2日間

会場：東京近辺

### 募集講演論文内容：

地質環境の変遷、地球環境の変遷、水域の地質環境とその変遷、水文地質学・地下水盆管理、地質汚染、有害地質、廃棄物層、地質圏における生物相・生物資源とその利用、地震地質、地質災害、地質環境の有効利用・持続的利用、農業地質学、土壌地質学、地質環境の長期安定性、地文学・法地質学・社会地質学、医療地質、地質の多様性、Green Geology、地質環境指標（Geo-Indicators）、現世堆積物、地質環境調査に関する調査方法・技術、環境教育、環境倫理など広く環境地質に関すること。

### 講演申込み要領：

- 1) 申込み方法：発表（講演と論文のセット）は同一発表者（トップ名）2題まで受け付けます。
- 2) 論文は、邦文または英文で書いて下さい。なお邦文論文については、英文要旨を1枚つけるとともに、図・表はキャプションも含めてすべて英文で書いて下さい。英文論文は、400字以内の日本語要旨を付けてください。
- 3) シンポジウム論文集は、提出されたA4サイズ原稿をそのままB5版にオフセット印刷します。よって、図のレイアウトや大きさ、誤字・脱字等の原稿の不備は執筆者の責任となりますので注意して下さい。なお、今回から書式の統一性を図りたいと思います。追って詳細な書式をニュース紙やホームページならびに、発表希望者に連絡しますので、その書式に合わせて、原稿を作成してください。
- 4) また、当委員会ホームページに事前に講演要旨を掲載いたしますので、11月上旬までに、400字以内の日本語要旨も電子ファイル化してお送りいただくこととなります。
- 5) 投稿原稿には著者の連絡先、原稿の枚数等を記入した所定の様式の投稿整理カードを添えると同時に、投稿原稿内容の保証書・著作権譲渡等同意書に必要な署名をして提出して下さい。
- 6) なお、論文講演者には別刷30部を進呈いたします。
- 7) 「報告」の発表（従来どおりの発表）をされる方は、2004年9月25日までに下記宛でもしくは、日本地質学会環境地質研究委員会ホームページ（<http://www.bekkoame.ne.jp/~jcengeo>）にて下記の報告発表申込み用紙を写して記入し、申し込んで下さい。

申込書受領後、執筆要領・原稿見本・投稿整理カード・保証書・著作権譲渡等同意書を10月上旬に送付します。報告論文は、A4用紙に執筆要領に従って、4枚または6枚（5枚は不可）でまとめ、2003年10月31日までに提出して下さい。

- 8) 「論説」の発表（査読審査論文の発表）をされる方は、論説論文を、A4用紙に執筆要領に従って、4枚～10枚の偶数枚（奇数枚は不可）でまとめ、2004年7月31日（必着）までに下記宛にて、完成原稿に投稿整理カード・保証書・著作権譲渡等同意書を添えて提出して下さい。これにあたり、執筆要領・原稿見本・投稿整理カード・保証書・著作権譲渡等同意書をお送りいたしますので、申し込み希望者の氏名と連絡先住所やメールアドレスを書いて日本地質学会環境地質研究委員会 風岡まで（メールアドレス o.kzok@mc.pref.chiba.jp ないし FAX 043-243-0263）御連絡ください。なお、論文審査は、複数の編集委員により審査を行います。審査項目は、①オリジナリティ、②論理性、③題名の適切性、④社会や地域への貢献度または貢献の可能性、⑤技術開発に関する貢献度または貢献の可能性、⑥引用文献の適切性、⑦規定されたフォーマットの遵守です。特に、④⑤に関しては、具体的に論文中に述べて下さい。

### 原稿・報告発表申込書等の送り先：

〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-18-15井桁ビル

日本地質学会環境地質研究委員会

TEL：03-5823-1150 FAX：03-5823-1156

### 会費（予定）：

- 1) 講演および参加（これらには、参加費・論文集代を含みます）
 

1 題報告発表の場合7,500円	2 題報告発表の場合8,000円
1 題論説発表の場合8,500円	2 題論説発表の場合9,500円
1 題報告発表 + 1 題論説発表の場合9,000円	
- 2) 参加のみ
 

一般参加費（論文集代含む）7,000円
学生参加費（論文集代含む）5,000円

### <報告発表申込み様式>

#### 第14回環境地質学シンポジウム報告発表申込み書

1	題名	
	発表者	
	内容	
2	題名	
	発表者	
	内容	
原稿送付先	〒	
住所	-----	
氏名		



### ○お知らせ：文部科学省「サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業」二次募集始まる

文部科学省では、平成14年度より、科学技術・理科、数学教育を充実させるため、「科学技術・理科大好きプラン」を推進しています。その一環として、中学校、高等学校等と、大学、公的研究機関、民間企業等との連携により先進的な科学技術・理科、数学教育等を実施するための「サイエンス・パートナーシップ・プログラム事業（SPP事業）」を行っています。SPP事業は、大学、研究機関等の人材、施設、設備等を、学校における科学技術・理科、数学教育に活用するためのものであり、

- (1) 学校が大学、研究機関等の研究者、技術者を招へいし、科学技術・理科、数学に関する観察、実験、実習等の学習を行う「研究者招へい講座」に対する支援
- (2) 大学、研究機関等が学校と連携して、当該大学、研究機関等において、科学技術・理科、数学に関する観察、実験、実習等の学習を行う「教育連携講座」に対する支援
- (3) 各都道府県教育委員会、指定都市教育委員会及び中核市教育委員会や大学、研究機関等において、教員を対象とした科学技術・理科、数学に関する研修を行う「教員研修」に対する支援

等を実施することにより、大学、研究機関等と学校の連携のあり方についての調査研究を行うこととしています。

一次募集についてはすでに締め切られました。二次募集の締切は2004年6月10日（必着）です。教育委員会等を通じての申請とな

りますので、早めに準備を進めることをお勧めします。詳細は文部科学省「科学技術・理科大好きプラン」ホームページ

([http://www.mext.go.jp/a\\_menu/kagaku/daisuki/main10\\_a4.htm](http://www.mext.go.jp/a_menu/kagaku/daisuki/main10_a4.htm)) をご覧下さい。平成14～15年度の採用課題は受託機関のホームページ (<http://wave.mri.co.jp/spp/>) をご覧下さい。

#### 中・高等学校の先生方へ>

上記のSPP事業「研究者招へい講座」への支援を利用して、大学や研究機関の地質関係の研究者に、学校に来ていただいてはどうかでしょうか。先端的な研究のお話をさせていただくことで、地質学に対する生徒の興味・関心が増すことが期待されます。なお、身近に知り合いの研究者がいらない場合には、まずは学会事務局までご一報下さい。

#### 大学・研究機関の方へ>

学会事務局ないしは学校教育委員会の委員より、中・高等学校における「研究者招へい講座」への協力をお願いすることがあるかもしれません。その際は、都合のつく範囲でご協力下さい。また、地質関係の「教員研修」はあまり実施されません。ぜひ実施をご検討下さい。

### The Island Arcオンライン閲覧（登録）の方法

The Island Arc誌をオンラインで見たいが、その方法がわからないという問い合わせが多く寄せられています。次のように登録して、ご覧ください。

1. 学会HP中の「The Island Arc」をクリック。
2. 「オンライン閲覧」をクリック。
3. <http://www.blackwell-synergy.com/>をクリック。
4. 画面右上「register」からUsernameとPasswordをはじめに登録（個人登録）します。
5. 次に会員特別登録を行います。画面右上の「My Synergy」をクリック。
6. 中ほどにある「Access」をクリックし、「Offer Codes」にJGSと入力し、「Continue」をクリック。
7. 名前とIDの両方に7桁の会員番号を入力。これで会員特別登録は終了です。会員特別登録ははじめの1回のみ行います。
8. 「Journal」をクリックし、「The Island Arc」を選択。読みたい論文を探し、閲覧して下さい。
9. 登録後は、UsernameとPasswordを入力して「Login」→「My Synergy」でThe Island Arcが閲覧できます。



The Island Arc連絡調整委員会

## The Island Arc

☆近畿・四国  
・西日本支部

お知らせ

○2004年度支部合同例会  
シンポジウム「西南日本の中・古生代テクトニクス」の開催のお知らせ

日本地質学会三支部合同例会に際して、標題のシンポジウムを下記の要領で開催いたします。多数の皆様参加をお待ちしております。

シンポジウム開催の主旨：「日本地方地質誌（日本地質学会編、朝倉書店刊）の近畿、中国、四国、九州・沖縄の4巻を編集するにあたって、西南日本の中・古生代テクトニクスに関わる各巻共通の諸問題を整理し、問題点について共通認識を目指す。」

シンポジウム世話人：八尾 昭（代表）、佐野弘好、西山忠男、村田明広、榊原正幸、西村祐二郎、今岡照喜、奥平敬元。（問い合わせ先：八尾，大阪府立大学理学部地球学教室，TEL/FAX 06-6605-2604, e-mail yao@sci.osaka-cu.ac.jp）

プログラム

日程：2004年6月6日（日）09：00-16：00

会場：京都大学理学部6号館

開会

09：00-09：05 シンポジウム開催の主旨 [世話人会]

テーマ1：西南日本の地体構造区分

09：05-09：20 磯崎行雄（東京大学）：地質学者は愛をなくしたのか？-日本の地体構造論について-

09：20-09：35 西山忠男（熊本大）：中部九州肥後帯はQinling-Daibe-Sulu Collision Zoneの断片か？

テーマ2：内帯高压変成帯（いわゆる三郡帯）の区分・テクトニクス

09：35-09：55 西村祐二郎：周防帯と蓮華帯，ならびにそれらの広がり

テーマ3：オフィオライト（夜久野，大江山など）の区分・テクトニクス

09：55-10：10 石渡 明（金沢大）：夜久野・大江山オフィオライトに関する最近の知見-特にロシア沿海州とのつながり-

10：10-10：25 早坂康隆（広島大）：中国地方におけるオフィオライトの分布・区分とテクトニクス

討論 テーマ1・2・3 10：25-10：40

休憩 10：40-10：50

テーマ4：黒瀬川帯（定義，広がり，起源，テクトニクス）

10：50-11：05 波田重熙（神戸大）・吉倉紳一（高知大）：“黒瀬

川帯”はどこから来たのか？

11：05-11：15 山北 聡（宮崎大）：黒瀬川帯は白亜紀に左横すべりしたのか？-構造地質学的検討-

11：15-11：25 八尾 昭（大阪市大）：“黒瀬川帯”をどうとらえればよいのか？

テーマ5：付加体（内外帯付加体の全比較）

11：25-11：35 村田明広（徳島大）：四国東部，西部の秩父帯の地質構造

11：35-11：45 尾上哲治・佐野弘好（九州大）：秩父南帯と三宝山帯の付加コンプレックスの比較

11：45-11：55 中江 訓（産総研）：西南日本内帯・外帯ジュラ紀付加体の比較：珪質-陸源堆積物の層序・年代について

11：55-12：00 佐野弘好（九州大）：西南日本ジュラ紀付加体中の上部三畳系深海成石灰岩について

討論 テーマ4・5 12：00-12：15

昼休み 12：15-13：15

テーマ6：領家・三波川帯の形成・上昇テクトニクス

13：15-13：25 奥平敬元（大阪市大）：領家変成帯の西南日本白亜紀テクトニクスにおける意味

13：25-13：35 青矢睦月（名古屋大）：三波川帯沈み込み時のテクトニックセッティング

13：35-13：45 Simon Wallis（名古屋大）：三波川帯の巨視的構造とテクトニクス

テーマ7：後期中生代火成作用のステージ区分

13：45-13：55 香掛俊夫（愛知大）：近畿地方の後期中生代火成作用

13：55-14：05 今岡照喜（山口大）：中国地方の後期中生代火成作用

14：05-14：15 奥平敬元・吉武美子（大阪市大）：白亜紀酸性火成作用の熱源-その時スラブウィンドウは開いたか？-

テーマ8：後期中生代前弧堆積作用のテクトニクス

14：15-14：25 君波和雄（山口大）：碎屑岩組成からみた白亜紀-古第三紀西南日本のテクトニクス

14：25-14：35 木村克己・栗本史雄（産総研）・竹内 誠（名古屋大）・Koen de Yong（Nat. Taiwan Univ.）：紀伊半島四万十帯北帯のテクトニクス

14：35-14：45 坂井 卓（九州大）：九州-山口地域の中生代後期-新生代後期堆積盆の発達過程と西南日本の地体構造の変革作用

討論 テーマ6・7・8 14：45-15：00

休憩 15：00-15：10

総合討論 15：10-16：00

（世話人 八尾 昭）



☆関東支部

お知らせ

総会と講演会

関東支部では、2004年度支部総会を下記のとおり開催いたします。総会成立には支部会員の1/30以上の出席（委任状可）を必要としますので、多数の支部会員のご参加をお願いします。総会に出席できない方は、下記委任状に必要事項を自署いただき、ファックスまたは郵送にて御送付お願いいたします。（5月10日必着）

なお、当日は総会のほか、以下の講演会を予定しています。この講演会は会員以外の方も参加することが出来ます。関心ある方をお誘い合わせのうえ御参加下さい。

○2004年度関東支部総会

講演会「阪神淡路大震災から10年、地震学・地震地質学・耐震工学の到達点」

日時 2004年5月15日（土）13：00～17：00

場所 北とびあ（JR京浜東北線王子駅北口下車 徒歩2分）

総会議事：

2003年度活動報告、同会計報告、2004年度活動方針、規約の一部改正、その他

参加費：無料（講演会要旨集は実費販売）

※講演会はどなたでも参加できます。申し込み不要

13：00～14：00 古村孝志（東大地震研）：「地下構造と波形シミュレーション（仮題）」

関東平野の地震を中心に、日本列島の地下構造・テクトニクスと地震波動伝播・強震動の生成についてお話をいただきます。

14：00～14：30 総会行事

14：30～15：30 山崎晴雄（都立大）「活断層研究の到達点（仮題）」

この十年間、日本各地で行われた活断層調査から明らかになったことについてお話いただきます。

15：30～16：30 瀬尾和夫「大都市地下構造調査と耐震工学の課題（仮題）」

南関東平野の地下構造調査と長周期地震動について、耐震工学の立場からお話いただきます。

16：30～17：00 総合討論

（支部長 中山俊雄）

<委任状；2004年5月10日（月）必着>

委任状送付先：〒101-0032 東京都千代田区岩本町2-8-15 井桁ビル6F  
日本地質学会事務局気付 関東支部事務局（FAX 03-5823-1156）

関東支部総会委任状

2004年5月15日（土）開催の日本地質学会関東支部総会に出席できませんので、当日一切の議決権を 君（又は、議長に）委任します。

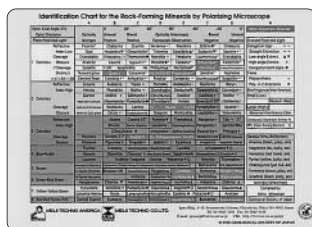
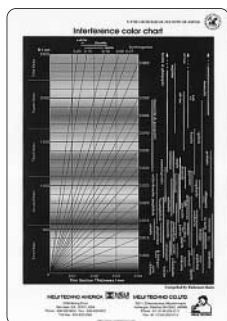
2004年 月 日

住所：

会員氏名：

印

「干渉色図表」・「偏光顕微鏡による鉱物鑑定表」（英語版）が下敷き（プラスチック製/A4版/両面カラー）になりました。



岩石学を学習する学生さんをはじめ、偏光顕微鏡を使用する全ての研究者の方々に有効に活用していただけることと思います。ご希望の方は学会事務局までお問い合わせ下さい。

会員価格 200円 非会員価格 300円

NOW ON SALE !!

大学院生（若手）にとっての地質学会

片山郁夫：エール大学 地質・地球物理学科

院生のみなさんは地質学会をどのようにとらえているのでしょうか。長かった大学院生活を終えてみて、ふとそんな疑問が頭をよぎりました。なぜなら、近年の地質学会では大学院生の発表が減少している気がしてならないからです。実際、院生会員の経年変化を見てみると、ここ数年で院生会員数が以前の約半数に減少しています。これは近年、学会が分散化しており、また多くの地球科学関連学会を網羅している地球惑星科学合同大会の存在によるのかもしれませんが。例えば、私が在籍していた大学院においても地質学会には参加せずに合同大会のみに参加している地質系院生が少なからずいました。しかし、地質学を基礎に研究者を目指している者としては少し寂しい気がします。確かに近年は境界領域が重要視され、異分野との交流が活発に行われるようになりました。一つの分野にこだわらず、異分野の新しい知識を習得するのはとても魅力的です。またそのような知識の融合は新しい科学の駆動力になっているのも確かでしょう。しかし、その一方で一つの専門分野を掘り下げて理解する時間が少なくなってしまうのも事実です。限られた時間の中、どの分野を基礎にして研究を進めていくかを決断するのはとても重要な問題です。そして、基礎となる専門知識を手に入れることは研究者の道を進むかどうにかかわらず今後の自信になると思います。では、何が地球科学の基礎になっているかと考えると、やはり地球で起きるすべての現象の産物である地質をおいて他にはないでしょう（と私は思います）。最新の分析機器で同位体元素を分析するにしろ、数ミクロンの化石を顕微鏡で観察するにしても扱う物質の産状を把握できていなくてはその分析結果の意味は半減してしまいます。また、一方で活発な火山活動や地震等の自然現象を体験して地質の分野に興味を持ち、またそれらに伴う災害を目のあたりにする等して責任感を駆り立てられる若者はたくさんいるでしょう。

話がやや逸れていってしまいましたが、では、なぜそのような魅力的な分野であるはずの地質学の学会に参加する院生数が減少しているのでしょうか。学会とは各々の研究を発表し、それに対し多くの人と議論できる数少ない場であるといっているのでしょうか。研究の最前線で活躍している先生方からコメントやヒントをもらい研究が急に加速されることも大いにあります。一方で、同年代の研究をしている若者同士でそれぞれに意見を交換し議論するのも大変に有意義な時間です。しかしながら、院生参加者が減少している状況下ではどうしても若手同士のつながりが少なくなってしまうのも事実です。学会発表での限られた質疑応答の時間の中では、疑問に感じた点を質問しようと考えてもその内容がごく当然であったらどうしようかと考えているうちに次の講演に移ってしまい質問できずに苦い経験を持つ学生は多くいると思います。その結果、自分の発表以外では自発的に意見を交換することなく学会を終えてしまうこともあるでしょう。ですが、研究は自発的に進めていくのが面白いわけですから、そのような受け身的に過ごす学会を面白くないと考えてしまう学生は多くいるのかもしれませんが。また、研究内容があまりにも専門的、地域的に絞られてしまうことで、当初の自然現象への根本的な探究心を見失い地質学という分野への魅力が薄れてしまう院生もいるかもしれません。そのような状況でもその専門的、地域的な研究の本質を噛み砕いて議論しあえる同年代の仲間はとても重要に思います。好奇心は旺盛ですが各自の研究に手一杯である院生にとって、同年代の仲間から各々の研究の説明を受けるのは知識を広げる近道の一つです。また、話す側も自分の研究分野以外の人に話す時は分かりやすく説明する必要がある、その中でもう一度研究の原

点に立ち返ることができるかもしれません。そのような話し合いでは学会中の質問時間では尋ねることができなかった質問もすることができるといえるでしょう。専門分野以外の仲間との議論から意外と研究のヒントが見つかることもあるかもしれません。臆することなく意見を交換しあえる同年代の仲間を持つことは研究にとどまらず大事な存在になるでしょう。

他方、学会側の立場からしても大学院生の参加はおおいに歓迎されるものです。将来を担う若手研究者を育てていくという教育の面のみならず、突拍子もない院生の発言から新たな発想が生まれることが無いとも限りません。様々な年代、思考を備えた人材は学会の活性化には欠かせません。しかしながら、近年では学会の分散化の為に専門学会に参加する院生数が減少傾向になり、それが悪循環をもたらした地質学会での学生参加数が減少の一途を辿っているのかもしれませんが。そうだとすれば、ここでこの減少傾向を止めない限り、地質学会に参加する院生数がますます減少していく可能性がないとも限りません。地球惑星科学全体の総合的な学会の存在も重要ですが、その基盤となる専門学会抜きにその存在はあり得ません。地球惑星科学関連分野を頭でっかちではなく土台がしっかりとしたものにする為にも、まずは共通の基礎分野を持つ研究者が多く参加している学会で意見を交換してみてもどうでしょうか。そのような専門学会でのコミュニケーションから総合学会に新たな提言を発信できるのではないのでしょうか。とはいえ、仲間が誰も参加していない学会の情報は手に入りにくいですし、一人でそのような学会に参加し始めるのは大学院生にとってなかなか難しいかもしれません。以下に若手が主体となり活動している地質関連の研究集会をいくつか挙げました。研究の進展には、いろいろな人と議論することがとても重要です。まずはそのような研究集会に参加し、同年代の研究者どうして意見を交換してみるのはどうでしょう。そこでは、同年代の研究者におおいに刺激され、また時間を忘れて議論することにより研究の面白さを再確認することができるでしょう。そして、そこで築いたネットワークを地質学会にまで広げることになれば、それは学会の活性化にもつながります。

火山若手の会連絡先：

奥村 聡 (東工大, sokumura@geo.titech.ac.jp)  
 野口 聡 (金沢大, noguson@earth.s.kanazawa-u.ac.jp)  
 荻津 達 (東大, itaru@eps.s.u-tokyo.ac.jp)  
 Web site: [http://hakone.eri.u-tokyo.ac.jp/wakate/wakate\\_info.html](http://hakone.eri.u-tokyo.ac.jp/wakate/wakate_info.html)

花崗岩若手の会：連絡先

金丸龍夫 (神戸大, 995d829n@y01.kobe-u.ac.jp)  
 Web site: <http://granite-wakate.hp.infoseek.co.jp/index.html>

古地磁気・岩石磁気若手の会：連絡先

菅沼悠介 (東大, suga@ori.u-tokyo.ac.jp)

テクニクス若手セミナー：連絡先

河野義生 (横国大, d03ta007@ynu.ac.jp)

以上は私が知る限りのセミナーを紹介しましたが、その他にも若手主催のセミナーは多くあるでしょう。そのようなセミナーでどのような活動がなされているかをこの院生コーナーを活用して紹介してもらえれば、より多くの若手が参加し議論がさらに活発になるのではないのでしょうか。

私がここであえて説明する必要もないかもしれませんが、地質学会は法人化を目前に今変革の時を迎えています。このような時に私達若手は何を担えるのでしょうか。やはり、学会で最も重要なのは学会活動に参加して大いに発表議論するほかにありません。研究を始めたばかりだからといって後込みする必要は全くありません。かえ

って知識が多いほど自在さを失ってしまうこともあります。学会期間中は一人の研究者として自由に意見を交換してみてもどうでしょうか。質疑応答の時間が限られていたら、発表の後でも構いません。若手のみなさんが自発的に学会期間を過ごすことの積み重ねが地質学会の発展に繋がるのだと思います。これまでに築かれた地質学会の精神を受け継ぐだけでなく、私達若手から新たな意見を発信し日本の地質学を盛り上げていこうではありませんか。

## アメリカ地質学会に参加して

北崎朋美：横浜国立大学大学院環境情報学部  
環境生命学専攻博士課程1年

2003年11月2日～5日にアメリカのシアトルで行われた、アメリカ地質学会（Geological Society of America: GSA）に参加してきました。私にとっては初めての海外での学会であり、楽しみではあるものの、果たして英語が聞き取れるのだろうか、話せるのだろうか、という不安を抱えての参加となりました。学会は、アメリカの西海岸、カナダとの国境に近いシアトルのWashington state convention & trade centerという場所で行われました。シアトルは北海道よりも高緯度に位置しているため気温は低く、みぞれ混じりの雨が降る日もありました。また、シアトルはスターバックス発祥の地だけあり、街のいたるところにスターバックスをはじめとしてさまざまなコーヒESHOPが建ち並んでいました。

学会がはじまる前日の11月1日には、“Biogeochemical processes at Ancient methane seeps: the Bear river site in Southwestern Washington”という巡検に事前に申し込みをしていなかったにもかかわらず、当日に参加させていただきました。この巡検では主に、始新世の化学合成化石群集を観察することができました。巡検は、まだ暗い朝の5時半（！）に集合し、案内者のJames L. GoedertさんとSteven R. Benhamさんの運転する2台の車に乗って出発しました。徐々に明るくなっていくシアトルの街を眺めながら高速道路を走る数時間、すっかり明るくなった頃にStop1のMenlo depositに到着しました。ここは、川へと下る斜面に化学合成化石群集を含むブロックが所々に露出し、それらのブロックには、およそ2cm程のModiolusがたくさん含まれていました。次に、Stop2では、化学合成化石群集を含まない浅い海の堆積物が、道路沿いに露出していました。ここでは、コンクリーション中からカニの化石が主に産出するとのことでしたが、私は他の参加者の人達と同様に、いくつかの貝化石を採取できただけでした。しかし、案内者のGoedertさんがすでに採取したカニの化石（しかもクリーニング済み）が配られ、全員がカニ化石を持ち帰ることができました。Stop3のBear River siteは、採石場の跡地でStop1よりも広い範囲に化学合成化石群集を含むブロックが散在していました。ブロックからは、1cmほどの大きさのModiolusが主に産出し、Tube wormなどの化石も産出しました。また、Benhamさんがつるはしを用いて豪快に壊したブロックのなかには、5cmよりも大きなCalyptogenaの化石が多く含まれていて、Benhamさんの「好きに持っていったいいよ」と言ったであろう言葉に甘えて、両手いっぱいCalyptogena化石を持ち帰ることができました。Stop1とStop3はGodert and Squires (1990) やSquires and Godert (1991) などの論文で、産出する貝化石についてはその種構成などが記載されており、どちらも現地性の化学合成化石群集であるとされていますが、その産状についてはあまり詳しい記載がありませんでした。

しかし、今回の巡検でこの両方の化学合成化石群集の産状を自分で観察することができました。Stop4では、Grays Bayの海岸に見られるカルサイトの葉理の縞模様がよく発達したlimestoneの転石を観察しました。ここでは、貝化石はほとんど観察されませんでした。以上の4ヶ所の巡検を終えて、朝の集合場所に帰ってきたのは、夜の8時過ぎ（！）という、なんとも長い巡検でしたが、それぞれのStopでは、観察や化石を採取する時間が十分にあり、たくさんの化石を持ち帰ることができました。

一般口頭発表およびポスター発表が、次の日から行われ、いくつかのセッションを聞きました。それぞれのセッションについての感想はここでは割愛させていただきますが、全体を通して思ったことは、自分の研究に関係している発表については、聞き取れた単語や文章、映し出されている図や写真などから大筋は理解できるということでした。普段の大学や国内学会などでは、英語の発表を聞くという機会があまりなかったので発表の内容が全然理解できなかったらどうしようと、前日に英語のアブストラクトを読みながら不安だったのですが、いざ発表を聞いてみると全部を理解できたとは言えないものの、だいたいの内容をつかむことはできました。また、どのようなことに研究の興味や関心が移ってきているのかなども知ることができました。

最終日の11月5日にポスター発表を行いました。ポスター会場は、最終日にもかかわらず多くの人が訪れていました。前日まで毎日たくさんの口頭発表を聞いたとはいえ英語がすぐに聞き取れたり、多くのポスター発表者のように自分のポスターを見ている人に積極的に話しかけることができるわけではありませんでしたが、つたない英語を駆使して、相手の質問に答えたり、研究内容を説明したりすることができました。始めの頃は、とても緊張していて相手の質問が聞き取れてもその質問に答えるまでに時間がかかってしまい、その間が余計に緊張感を高めてしまうといったかんじでした。しかし、途中からはちゃんと英語を話そう、話そうと考えるのはやめて、答えられないほど難しいことを聞かれているわけではない、と自分に言い聞かせて、とにかくきちんとした文章になっていなくてもいいから間をおかずに質問に答えようとしているうちに、だんだんと緊張もほぐれていきました。そして、2時間ほどのポスター発表の時間が終わり、私の初めての国際学会も無事に終了しました。

それほど英語がしゃべれたり、聞き取れたりするわけではない私が、今回アメリカ地質学会に参加して、外国の研究者の発表を聞いたり、自分の研究について英語で説明したりと今までにない経験をする事ができました。確かに、もっと自分の研究に対する専門の知識や語学力があれば、もっと実りある5日間になったかもしれません。しかし、これからもきっと、より必要になってくる英語に対して、恐れという緊張をなくすという意味においては、非常によい経験ができたと思っています。日本にいるときには、英語で自分の研究について説明したりする機会はほとんどなく、また英語を話すことにもなんだか気恥ずかしい部分がありましたが、実際、国際学会に参加してみると、英語で研究について説明したり、話すことに必死になる自分を発見し、それが研究に対してもよい刺激になったと思います。ですから、みなさんも国際学会に参加して、英語で研究について話さなければならないという状況に自分を置いてみるのは、いかがでしょうか。

## 文献

- Godert, J.L. and Squires, R.L., 1990. Eocene deep-sea communities in localized limestones formed by subduction-related methane seeps, southwestern Washington. *Geology*, **18**, 1182-1185.
- Squires, R.L., and Godert, J.L., 1991. New Late Eocene mollusks from localized limestone deposits formed by subduction-related methane seeps, Southwestern Washington. *Jour.Paleont.*, **65**, 412-416.

## 学会記事

### 2004年度 第6回理事会 議事録

期 日：2004年1月21日（水）

13：00～17：00

場 所：地質学会事務所

出席者：平会長、加藤副会長、木村副会長、  
玉生副常務理事、運営財政部会-天野・上  
砂、学研-徐・伊藤、編出-狩野・宮下・会  
田、普教-公文・中井・吉田、橋辺（事務  
局）

欠席者：渡部常務理事・脇田・大友

#### ○報 告

1. 運営財政部会（部会長-天野 副部会長-  
大友、上砂）

総務委員会（委員長-天野）

庶務関係（担当-天野）

・文部科学省とJAMSTECに対し、深海無人探査機「かいこう」ビーグル（子機）新造に関する要望書を1月9日付けで提出した。

・19th IMA（国際鉱物学連合会議）組織委員会より、同会議の後援依頼があり、国際交流委員会の上承を受けたうえで、了解の返事をする事とする。

・高木宏行弁護士および篠原通夫会計士に対し、今年の顧問契約書を発行した。

なお、高木弁護士への謝礼は会計士と同様の月2万円として、上承をいただいている。

・INHIGEOから要請のあった地質科学文書収集に当たっての連絡窓口となる方については、地学史懇話会にご相談いただき、会田信行さんが窓口となり、今後地学史懇話会が対応してくれるとのことである。

・41回理工学における同位元素研究発表会論文募集案内 → メ切2月27日

・産総研より地質調査総合センターのコーディネーター交代の挨拶状 → 新 佃 栄吉

・第7回国際土壌・地下水環境ワークショップ（1/22、後援）の開催案内が届いた。

・学会事務センターより、2003年フランクフルトブックフェア出展お礼が届いた。

会員関係（担当-上砂）

1）入退会の承認

入会：正会員2名、正会員（院生割引）2名、  
準会員1名

退会：正会員73名

逝去：名誉会員1名、正会員1名

小野寺透（03年9月21日）、中原竜二  
（03年6月28日）

2）12月末現在会員数 賛助会員39社、名誉

会員7名、正4786名（うち院生割引260）、  
準会員41名、合計4941名

3）除籍予定者（2000年から4年間会費滞  
納）：106名

4）宇都宮大学の科目履修生から、学生会員  
にして欲しい旨の連絡あり。協議の結果、  
本件については承認することとした。今後、  
同様な案件が要請された場合は、個別審査  
する事とした。

会計関係（担当-大友・上砂）

・会計報告（11月までの会計報告）

・図書代金の支払いの際の振り込み料金受  
取人負担の諾否について（大学独法化で  
増加か？）

・千葉大会の予算が提出された。

広報委員会（担当-大友）

ニュース誌編集小委員会（担当-大友）

・ニュース誌編集状況

1月号（1/19校了）2005年度選挙公示、  
選挙細則・内規・立候補届出用紙、千葉  
大会トピックセッション・シンポジウム  
公募のお知らせ、評議員会および理事会  
議事録ほか

インターネット運営小委員会（委員長  
渡部直喜、担当-大友）

・今年度のインターネット運営小委員会  
の委員が下記のメンバーに決まった。

幹事：吉田孝紀 委員：立石雅昭、  
Martin Andrew、宮下由香里、  
芳野 極

2. 学術研究部会（部会長-徐 副部会長-伊  
藤、脇田）

行事委員会（徐委員長）

・千葉大会準備委員会ニュースNO.1を1  
月号に掲載。

準備委員会から千葉大会の方針、行事委  
員会からはトピックセッション（10件程  
度）ならびにシンポジウム（6件）の公  
募

国際交流委員会（委員長-脇田）

・19th IMA（国際鉱物学連合会議）組  
織委員会より、同会議の後援依頼があっ  
た。上承することとした。

3. 編集出版部会（部会長-狩野 副部会長-  
宮下・会田）

地質学雑誌編集委員会（委員長-狩野 副  
委員長-宮下）

・地質学雑誌編集状況

109巻完了 総ページ：727ページ

・今月の編集状況は以下の通り。（1月20  
日現在）

本年度投稿論文数8編〔論説7編（和文

7）、短報1（欧文1）〕口絵1（和文1）  
昨年比 +5

査読中 44編

・109巻11月号掲載分の別刷製本に不備が  
あり、著者から苦情が寄せられた。不備  
の別刷りは回収し、製本作業をやり直し  
て著者に再送した。現在の業者には少頁  
印刷物に対応した製本機械がないため、  
糊付けの際に問題が出やすい。今後は作  
業工程中のチェックを入念に行うなど  
し、不備がないよう指示した。

企画出版委員会（担当理事 吉田）

・井内美郎代表「沖積層層序の新展開（仮  
称）」（20論文、200ページ）の企画がだ  
された。

・フィールドジオロジー刊行委員会（秋山  
委員長）

フィールドジオロジーの状況報告（天野  
委員）

The Island arc 連絡調整委員会（担当-  
会田）

・今年度刊行の状況報告書を学振に提出し  
た。今年の1月号までの刊行予定は順調  
で申請より30ページ程度上回る見込み。  
ブラックウェル社から、地質学会のホー  
ムページからアイランドアークのオンラ  
イン購読に入れるよう提案があり、現在  
書類を取り交わし準備中である。

4. 普及教育事業部会（部会長-公文 副部  
会長-中井、吉田）

学校教育委員会（委員長-阿部国広）

・1月16日委員会を開催。千葉大会向け  
て行事の企画などを検討。

・阿部委員長から19回および20回の委員会  
議事録が送付された。

中井理事より、千葉大会への取り組み、  
地球惑星連合大会地学教育委員会等への  
対応などについて説明があった。また、  
学校教育委員会ならびに地学教育研究委  
員会の関係については、今後統合するこ  
とも含めて整理、検討していくことが  
話しあわれたとの報告があった。

生涯教育委員会（委員長-柴 正博）

・阿蘇火山博物館存続のその後として、現  
在火山専門家や文化・社会などの研究者  
たちによってNPO法人「阿蘇ミュージア  
ム」の立ち上げ準備中。現状では、い  
まだ博物館の引き受け手は見つかって  
おらず、NPOの活動を展開していきな  
か博物館の利用や今後の事を考えてい  
くとのこと。

フィールドジオロジーの刊行（担当-天野）



・1997年度第4回評議員会で出版計画が承認されたフィールドジオロジー(全9巻)が2004年4月より刊行が開始される。4月に第1巻(フィールドジオロジー入門)と第3巻(堆積物と堆積岩)が、5月に第7巻(変成・変形作用)が出版される予定。編集委員長:秋山雅彦, 編集幹事:天野一男・高橋正樹。なお、フィールドジオロジー編集委員会は、従来、地質学普及教育実行委員会(高橋正樹委員長)のもとにあったが、委員会の再編等によりその所属が不明確となった。今後の活動の位置づけを明確にするために、本委員会を企画出版委員会のもとに移動する。

#### 5. その他ー1

支部長連絡会議(担当:玉生)  
地質災害委員会との合同会議議事録が報告された(12/13開催分)

地質災害委員会(担当:玉生)  
支部長連絡会議との合同会議議事録が報告された(12/13開催分)

JABEE委員会(委員長:三宅康行)

・学術会議での報告会の紹介  
これからJABEE審査を受けることを予定している大学がいくつかあるにもかかわらず、大学からの参加者が少なかった。JABEE「地球・資源分野」の認定コース修了者に対して、技術士会は資源地質技術士補のみを認定し、応用理学技術士補は認定しないかのような発言があった。これは由々しき問題なので、しっかり監視する必要がある。

【以下、評議員会の下の委員会】

学術会議連絡委員会(委員長:井内美郎)  
・当委員会の委員長は今後、井内評議員(地質研連委員)をお願いしたいということになった。

法人化準備委員会(委員長:木村 学, 幹事委員:立石, 担当:渡部・玉生)

・1月21日, 18時より法人化準備委員会を開催予定  
・法人化資料(案)(議題へ)  
・1月19日現在, 募金額は, 6,920,850円, 募金者は187名, 2グループである。

法務委員会(委員長:上砂)

・12月24日, 第1回法務委員会を開催した。

倫理規定策定委員会(委員長:松本 良, 担当:伊藤)

・2月19日, 18時半より委員会を開催予定

選挙管理委員会(委員長:手塚裕樹 担当:天野)

・News誌1月号に選挙公示を掲載した。立候補受付期間2月1日～2月29日ま

で。

#### ○議題

##### 1. 全地連によるNPO設立に関して

以前、大矢さんから平会長に、地質学会からもこのNPOに人を出して欲しいとの依頼があった。天野理事が確認したところ、学会代表としてではなく、連絡役として人を出して欲しいとの趣旨であった。協議の結果、連絡役を天野理事にお願いすることとした。

##### 2. 選挙公示(News誌1号)後の対策について

・選挙管理委員会との協力体制  
・立候補の促進・確保(立候補受付期間2月1日～2月29日まで)

##### 3. 法人化関連の資料整備について

・設立趣旨  
・地質学会組織図の整備(HPにも掲載)  
・今後3年間の事業計画および収支予算  
・文科省に持っていく時期から逆算して、それぞれの書類を完成させる。学術研究のみならず、社会に役立つ戦略的な取り組みについても、事業計画や組織図に反映させることとした。

##### 4. ホームページにおける会員限定ページへのアクセスについて

・ID: geosociety・パスワード: gsjによって会員はアクセス可能。News誌1月号で紹介、広報。  
・理事会および評議員会議事録は全文掲載でよいか、掲載期間は? 個人情報保護の立場から、入退会者の個人名は議事録から除くこととする。委員等の氏名は掲載しても良い。掲載期間は総会から総会までの1年間とする。  
・選挙公示全文、選挙広報2月1日以降の候補者数の掲載  
・現在トップページにある評議員会のアクセスボタンについて  
今後必要か。理事会に置き換えることもできるが、会員限定ページとの関係は? 評議員会と限定せず「会議議事録」などとして利用する。  
・アイランドアーク電子購読のためにも地質学会のホームページに、会員の個人パスワードによる会員限定の仕組みを作る必要がある。サーバーとなっている会社に、どの程度の費用がかかるか見積を依頼することとした。

##### 5. 千葉大会以降における「学会講演受理、予稿集、見学旅行案内書」のあり方について

1) 学会講演の受理方法(著作権等に関連する諸手続きおよび問題が出た場合の対策)は提案通りに了承された。但し表現を若干

修正することとした。

2) 予稿集の改定案: 地質学雑誌のsupplementとしてはどうか、については提案を支持し、今後地質学雑誌のあり方なども含めて詳細を検討していくこととした。

3) 巡検案内書: CD-ROM版にすることも検討することとした。

4) スケジュール: 予告案内を1ヶ月早めて4月号News誌に、演題と要旨は同時提出になるなど提案を了承した。

##### 6. 論集の企画について

井内美郎代表「沖積層層序の新展開(仮称)」企画は了承された。ただし、販売見込みについてよく検討したうえで印刷部数を考える。たとえば、1000部印刷した場合の印刷費用概算(120万)の消却に相当する600部の販売見込みについて判断をつめて示してもらうなど。今後の執筆状況を受けて、中間報告ならびに詳細な見積をしてもらう。

##### 7. 著作権関連

・科学技術振興機構(旧 科学技術振興事業団)から著者抄録利用許諾の件  
これまでも地質学雑誌の利用許可を出している。組織変更の業務引継ぎによる利用条件の変更による契約更新。  
・学術著作権協会より著作物の電子化利用の許諾権委託について(アンケート)  
・科学技術振興機構より、著作物複写のファクシミリサービスの許諾について  
上記の件については法務委員会の確認を得たうえでそれぞれ返事することとする。

##### 8. 地質学雑誌のあり方について

・新地質学雑誌諮問検討委員会(担当理事:加藤副会長, 宮下理事)  
加藤委員長より、検討内容のポイントと論点整理して説明があり、委員会の構成や今後の検討スケジュール等が話し合われ、6月までに答申の予定とした。  
なお、地質学雑誌とともに要旨集、論集(雑誌の特集とのおすみわけなど)も含めて検討することとした

##### 9. 評議員と理事の立場についての確認

・現理事会は、評議員を兼務(?)するの  
か、あるいは会則どおりの立場で評議員会に出席するのか、前回の評議員会で議決の際にわずかに混乱が見られたので、評議員会での理事(会長・副会長を含む)の立場の問題改めて確認したい。  
細則では、第20条(評議員は評議員会を組織する)、第21条5(1)(評議員会は評議員により構成される)、同6(評議員会は評議員の委任状を含む過半数の出席により成立)とある。また、第21条9では、「議長は評議員会での審議内容を

理事会に報告する」とある。理事・監事は「評議員会に出席するものとする」とあるが(第21条5(1)),前記4条の文言から,説明者であって構成メンバーではなく,議決権はもっていないものと解釈するのが論理的。なお,成立条件は書かれているが,議決条件が記されていない。”審議する”以上は,議決条件を記すべく細則改正が必要ではないか。理事会としては了承。次回の評議員会で,評議員会議長に了解を得た後,評議員に確認することとした。なお,議決条件については,細則改正の必要はないと思われる。

## 2004年度 第7回理事会 議事録

期 日:2004年2月20日(水)

13:30~17:00

場 所:地質学会事務所

出席者:平会長,加藤副会長,木村副会長,  
渡部常務理事・玉生副常務理事,運営財政  
部会・天野・上砂,学研・脇田,編出・狩野・  
宮下,普教・公文・吉田,  
橋辺(事務局)

欠席者:中井・大友・会田・徐・伊藤

### ○報 告

1. 運営財政部会(部会長・天野 副部会長・  
大友・上砂)

総務委員会(委員長・天野)

庶務関係(担当・天野)

・国際地質科学連合(IUGS)の「国際惑  
星地球年」(International Year of  
Planet Earth, IYPE)企画に対するの協  
力要請が,佐藤正IUGS副会長,および  
小松正幸学術会議会員を通じてあった。  
その旨,国際委員会に伝える。

・全地連関連のNPO組織設立の背景報告  
平成13年に全地連と地質調査所地質情報  
部との意見交換会からスタートした。そ  
れぞれの組織から独立した組織を作ると  
いうことで合意。

設立目的は1)一般の方への普及教育:  
ハイウェイ・ジオロジーの出版,環境ア  
トラス,ハザードマップ作成など。2)  
どこにデータがあるかを紹介する。3)  
中高年のマイスター人材の利活用。

会長:大矢,副会長:進藤,専務理事:  
岩松,理事(17名):地質学会関係の方  
では柳井,足立,ほか。天野理事は地質  
学会との連絡係りとして理事会に参加。  
WG:4グループ,地質学会からもWG  
メンバーを入れてもらったらいかがか?

・科学教育研究協議会より科学教育研究協  
議会第51回全国研究大会の後援依頼:8

月2日~4日,北海道道民センター,  
札幌西高校→了承\*)

・山口大学理学部より「サイエンスワール  
ド2004」の後援依頼:3月14日,山口ス  
ポーツ文化センター→了承\*)

・国際コンベンション「OCEANS'4  
MTS/IEEE/TECHNO-OCEAN'04」の  
協賛依頼:11月9日~12日,神戸国際展  
示場→了承)

・2004年世界アスベスト会議後援のお礼が  
届いた。メッセージを寄せればHPで紹  
介とのこと

・日本水環境学会セミナー「バイオマス  
の利用・活用と水環境」開催案内→News  
誌3月号掲載電子図書館サービス連絡会  
議開催,新コンテンツサービスの提供に  
あたり,学会誌の提供方法を改めて検討  
する必要があるため,その説明と意見交  
換,2月23日→事務局から細川が出席

・神奈川科学技術アカデミーより,平成16  
年度研究助成の募集,4月9日メ切→  
HPに掲載)

・消防予予防課より,消防科学技術研究推  
進制度の募集,4月9日メ切→HPに掲載)

・海洋情報部研究成果発表会開催通知,2  
月20日→HPに掲載済み

・地質情報整備・活用機構(NPO)の設  
立について

会員関係(担当・上砂)

1)入退会の承認

入会:正会員4名,正会員(院生割引)1名,  
準会員2名

退会:賛助1社,正11名

逝去:名誉1名,正2名  
新井房夫名誉会員(2月11日逝去),  
高島 彰(03年12月7日)

除籍 103名

2)1月末現在会員数 賛助39,名誉75,正  
4627(内,院割146),学生25合計4766名

3)会員管理システム(学会知恵袋V7)の  
システム凍結(04年3月31日)およびサポ  
ート停止年月(04年3月31日)の通知を受  
けた。

年会登録などで使用予定のソフトウェア  
“e-gakkai”との関連を調整する必要あり。  
9月頃までに,総務委員会,会計委員会,  
オンライン委員会とで相談して,対策案を  
提案してほしい。

会計関係(担当・大友・上砂)

・会計報告(12月までの会計報告)

・決算報告にはもう少し時間がかかるが,  
3月の理事会までには会計委員会の開催  
ならびに会計監査を行う予定で日程を調  
整中。

広報委員会(担当・大友)

ニュース誌編集小委員会(担当・大友)

・ニュース誌編集状況(2/18校了)

<2月号>

募金委員会からのお願い/学会法人化推進  
キャンペーン講演会/千葉大会ニュース  
No.2/研連報告2(古生物・地化)/公募  
2/紹介 2/The Island Arc編集委員長の  
交代にあたって・The Island Arc Vol.13  
Issue 1(March)日本語要旨/地質災害委  
員会 応用地質部会委員会コメント/院生  
コーナー/自動振替依頼書

<3月号>

未定

<4月号>木村副会長より,新人(学生・社  
会人)特集号とする企画案の提案,説明が  
あり,新入会員獲得も念頭に置いたキャン  
ペーン特集号を検討(3月中旬までに準備  
する必要あり)。各階層ごとに,2~3000  
字/頁程度原稿。巻頭は会長,一般社会  
人への呼びかけは上砂理事,新入生へは木  
村副会長,学生へは黒田院生評議員,先生  
への呼びかけは会田理事が執筆する事とす  
る。

インターネット運営小委員会(委員長 渡部  
直喜,担当・大友)

・学会HPの英文版を作る準備を具体化す  
ること。

2. 学術研究部会(部会長・徐 副部会長・伊  
藤,脇田)

行事委員会(徐委員長)

・千葉大会準備委員会ニュースNo.2を2月  
号に掲載。

国際交流委員会(委員長・脇田浩二)

・今夏のイタリアにおけるIGCより,会長  
宛の招待があった。木村副会長が参加す  
る予定ということで先方には返事をし  
た。

3. 編集出版部会(部会長・狩野 副部会長・  
宮下・会田)

地質学雑誌編集委員会(委員長・狩野 副  
委員長・宮下)

・地質学雑誌編集状況

今月の編集状況は以下の通り。(2月19  
日現在)

110-2:論説3・短報2・口絵1(2/18  
校了)

110-3:論説4・口絵1(校正中)

本年度投稿論文数15編[論説12編(和文  
12)短報3(和文2 欧文1),]口絵1  
(和文1)

投稿数昨年比 +6

査読中 51編

・新委員加入 小嶋 智(岐阜大)氏  
(任期2004年2月20日より)

・会員個人名でない「高等学校天文部」名  
で口絵原稿の投稿があったが,受け付け  
ることとした。

企画出版委員会(担当・吉田)

The Island arc連絡調整委員会(担当-会田)  
委員の交代の報告。

4. 普及教育事業部会(部会長-公文 副部  
会長-中井・吉田)  
学校教育委員会(委員長-阿部)  
・2月20日委員会開催

生涯教育委員会(委員長-柴)

・阿蘇火山博物館は、地元の製薬会社「阿  
蘇製薬株式会社」によって買収され、存  
続がきました。池辺伸一郎学芸員(会員)  
から報告とお礼が寄せられた。

#### 5. その他ー1

JABEE委員会(委員長-三宅)

・JABEE総会の開催

6月8日(火)13:00~15:30, 中央  
大学において開催

【以下、評議員会の下の委員会】

科研費委員会(委員長-竹内 章)

・平成17年度科研費審査委員候補者の推薦  
が研連よりあり、評議員会に候補者の推  
挙をした。

公文理事が確認のうえ、評議員の通信投  
票により候補者を2月中に選出、現在進  
行中。

法人化準備委員会(委員長-木村, 幹事委員-  
立石, 担当-渡部・玉生)

・2月19日文科科学省と折衝報告

木村副会長より、「報告案」を下に文科  
省との折衝を踏まえて、今後の見通しと  
積極的な対応について説明があった。

・3月20日、関東支部の協力を得て、法人  
化推進キャンペーン講演会を開催する。  
「地質学のルネッサンスー地質学と日本  
の未来を見据えて」(資料1参照)

加藤副会長より、趣旨や内容についての  
説明があった。2月号のニュース誌、  
HPへの掲載を行っている。

・2月17日現在、募金額は、7,522,850円、  
醸金者は216名、2グループである。

加藤副会長より、特に賛助会員を中心に  
法人への寄付依頼について検討中である  
ことが報告された。

法務委員会(委員長-上砂)

・2月23日、第2回委員会を開催予定。

倫理規定策定委員会(委員長-松本, 担当-伊  
藤)

・2月19日、18時30分より委員会を開催し、  
倫理規定について検討。

会則および細則の一部変更を検討

内容は23日の法務委員会に提出する。→  
その結果を3月理事会に報告

会則改定において、除名者が弁明できる  
方法を保障する文章が必要ではないか?

オンライン化委員会(委員長-鈴木)

・学会オンラインサービスの基盤システム  
(e-gakkai Plan4会員システム)の設定  
が完了(2月4日)。費用は、初期設定  
費用を含め¥161,700。一部サービス  
(学会HP会員認証システム, 2004年千葉  
大会オンライン申込)の整備は進行中。

選挙管理委員会(委員長 手塚裕樹 担当-  
天野)

・選挙スケジュール

3月3日に委員会開催し、立候補を最終  
的に確認。

3月10日までに投票用紙、広報を整えて  
会員に送付する。開票は4月24日。

#### ○議 題

##### 1. 選挙について(伊藤理事・事務局)

・地方区の扱い

立候補の後、選出前に転勤等で移動した  
場合、あるいは選出後に移動した場合の  
扱い

移動のため届出所属が変わった場合でも  
地方区の変更はしない。また、そのこと  
により実質減数となる地方区の設定補  
充は行わない。このことを内規に盛り込む。

・立候補受付メット1週間前の状況報告

##### 2. 評議員会の議題について

評議員会開催通知を24日には発送の予定。

・平成17年度科研費審査委員推薦について  
(通信投票の結果)

・倫理規定 → 会則・細則の一部変更

・法人化関連(今後の事業計画と予算)

・論集出版計画: 井内美郎代表「沖積層層  
序の新展開(仮称)」

・03年度決算報告

・地質学雑誌のありかた検討(中間報告)

・その他

##### 3. 文部科学省との面談(19日)について (木村副会長)

取扱が具体的にになってきた印象を得た。評  
議員会は定款に明記されていないので、形  
式上は問題ない。法人後の事業計画案を次  
回の理事会までに準備する。

##### 4. News誌4月号: 新入生(院生・学生)、 新入社員特集号、企画提案(木村副会長) 報告を参照

##### 5. 学術会議特別シンポ「日本発科学論文の 強化」(2月27日午後1時: 学術会議)参 加者派遣について(木村副会長) 宮下理事, 出席予定

##### 6. IODP乗船研究者派遣支援体制(木村副 会長) Jデスクとの間で連絡調整をはかり、学会 としてできることをしていく。

##### 7. アイランドアーク編集ボード新メンバー

の推薦(会田理事・渡部理事)

渡部理事より紹介があり、原案通り承認し  
た。

## 2004年度 第8回理事会 議事録

期 日: 2004年3月10日

(水) 13:30~17:00

場 所: 地質学会事務所

出席者: 加藤副会長, 木村副会長(4時以降),  
渡部常務理事・玉生副常務理事, 運営財政  
部会-天野・大友・上砂, 学研-, 編出-狩  
野・宮下・会田, 普教-公文・吉田・中井,  
橋辺(事務局)

欠席者: 平会長, 脇田, 伊藤, 徐

#### ○報 告

##### 1. 運営財政部会(部会長-天野 副部会長- 大友, 上砂)

総務委員会(委員長-天野)

庶務関係(担当-天野)

・第45回科学技術映像祭の開催と紹介記事  
に関する依頼(ホームページ等での)が  
あった

・東レ科学技術賞並びに東レ科学技術研究  
助成, 理科教育賞の15年度受賞者の報告  
があった。いずれも地質学及び地球科学  
関係の受賞者はなかった。授賞式への出  
席招待あり。

同16年度の募集概要についても通知され  
た(締め切り10月8日)

会員関係(担当-上砂)

1) 入退会の承認

入会: 正会員2名

退会: 正会員5名

2) 2月末現在会員数

賛助会員38社, 名誉会員74名, 正会員4630  
(内, 院生割引154),  
準会員26, 合計4768名

3) 会員管理システム(学会知恵袋V7)の  
システム凍結(04年3月31日)およびサポ  
ート停止年月(04年3月31日)の通知を受  
けた。

それ以降, 来年の3月まではバージョンア  
ップしたものしか対応しない。他のソフト  
に変更する可能性もあるので, 壊れる前に  
準備をすすめたい。

4) 本年予定の会員名簿改訂について下記の  
ような議論をした。

今年は名簿発行の年のため, 昨日の法務委  
員会で, どうするか議論した。個人情報の  
保護の観点から検討が必要である。次回  
の評議員会で議論していただく。従来から,  
各人に, 名簿記載事項の確認をし, 掲載し  
たくない項目は掲載していない。名簿作成  
に当たっては, 全会員に対して掲載可能か



どうか葉書で確認している。返事は毎回、100通程度で、返事のない人は、問題なしと見なして掲載していた。前回の会員名簿作成では前例通りとして作成した。掲載したくない人や事項が多いと、会員名簿を出す必要性がなくなる。選挙の時などは、名簿が必要である。学会としては、会員名簿の販売は一切しておらず、会員意外に会員名簿を配布することもしていない。10年ほど前に名簿からビデオを売りつけられるという被害があった。名簿を出す意義はある。交流を促す上では必要。掲載項目は本人が判断する。氏名、所属以外は本人の確認をとった上で、名簿発行とした。また、法務委員会においても検討していただき、「法的には、掲載の諾否について確認ができなかった会員は原則として非掲載として扱うべきであるが、その場合掲載数が激減する可能性があるので要検討。」とのコメントがあった。

#### 関連学会連合 (担当:天野)

- ・自然史学会連合  
2004年度第1回運営委員会報告が森田委員よりあった。
- ・地理関連学会連合  
第6回総会が、3月26日に開催される。賛同学会である地質学会に当総会への参加要請があった。大友理事に出席を依頼した。

#### 会計関係 (担当:大友・上砂)

- ・会計報告 (決算報告) (資料1 参照)  
2003年度決算報告を貸借対照表に基づき報告。決算内容で特に注目すべきことは、会員の減少で (退会者の増加) で、予定より収入が減少。
- ・法人化基本財産募金; 8,432,850円 (約200名) (会社からは1社のみ)  
改めて評議員などに対し、募金活動のお願いの呼びかけ文を、近日中に送付する。6月を目途に募金活動を行う。
- ・3/9会計監査があり、無事終了。

#### 広報委員会 (担当:大友)

- ニュース誌編集小委員会 (担当:大友)
- ・ニュース誌編集状況 (3月号校正中)  
<3月号>  
2005年度役員選挙のお知らせ/支部コーナー 北海道支部・中部支部 総会のお知らせ/近畿・西日本・四国支部 合同例会のお知らせ/環境地質研究委員会 環境地質学シンポジウムでの審査論文部門の新設のお知らせ/追悼 名誉会員早川正巳先生ほか  
<4月号>  
新入生,新社会人向け特集記事を準備中。  
インターネット運営小委員会 (委員長 渡部直喜, 担当:大友)
- ・学会HP英語版について検討中

#### 2. 学術研究部会 (部会長:徐 副部会長:伊藤・脇田)

- 行事委員会 (徐委員長)  
・千葉大会関連行事一般市民向け見学旅行について、千葉県教育委員会に対し会長名による後援依頼をした。

#### 3. 編集出版部会 (部会長:狩野 副部会長:宮下・会田)

- 地質学雑誌編集委員会 (委員長:狩野 副委員長:宮下)
- ・地質学雑誌編集状況  
今月の編集状況。(3月9日現在)  
110-3: 論説4・口絵1 (校正中)  
110-4: 論説4・口絵1・特別寄稿1 (3/10入稿予定)  
本年度投稿論文数20編 [論説17編 (和文17), 短報3 (和文2・欧文1)] 口絵2 (和文2)  
投稿数昨年比 +10  
査読中 49編
- ・2月号に印刷 (スキヤニング)・校正ミスによる図表の誤印刷があった。対応として3月号に訂正シールを添付する。
- ・編集委員の交代を検討中 (古生物関連)
- ・特別シンポジウム「グローバルな情報発信機能の強化に向けてー日本発科学技術誌の強化」の報告 (宮下)  
国産欧文誌への日本人の投稿が減少。海外の学会誌に投稿原稿が流れている。これでは日本の知的財産が、海外に流出していることになる。さまざまな電子ジャーナル化動向について紹介され、電子化による総合的科学雑誌の出版構想などもあるとのことである。過去の出版物のアーカイブ化。地質学雑誌,地質学論集については国立情報図書館でアーカイブ化されており、地質学会員も登録をすれば利用できる。岩鉱学会ではJ-stageを利用している。学会が使用条件を決められる。学会情報の公開を考えていくべきである。インパクトファクターの問題点が議論された。
- なお、本シンポジウムの紹介記事は、News誌4月号に掲載する予定 (本誌8p参照)。

#### The Island arc 編集委員会 (担当:渡部)

- ・ボード新メンバーの推薦

#### 企画出版委員会 (担当:吉田)

- ・地質学論集2編の状況  
編集スタイルは学会誌に従うこと。  
1. 地震イベント堆積物: 査読開始。  
学会からの編集委員として、吉田理事が加わるようになった。9月の学会に向けて発行準備中である。
- 2. 沖積層層序の新展開: これから検討
- ・天野理事よりフィールドジオロジーの出版状況報告があった。1, 3巻を3月末に出版予定。以後順次出版予定。会長に

カバー扉の推薦文を依頼する。印税の10%は地質学会に寄付する。

#### The Island arc 連絡調整委員会 (担当:会田)

- ・ブラックウェル社から新契約案が示され、大筋で合意
- ・The Island arcをオンライン閲覧しようとしたが出来なかった事例があった。確認したところ、昨年アクセスした人のみ、閲覧可能、しばらくアクセスしなかった場合は、閲覧できない状態にしてあるとのことであった。  
この問題を解決するために、改めて会員名簿を登録しなおす必要があるため、至急更新された会員名簿を提供するとともに、暫定的にホームページに会員向けの説明を掲載したい。

#### 4. 普及教育事業部会 (部会長:公文 副部会長:中井睦美, 吉田武義)

- 学校教育委員会 (委員長:阿部)
- ・2/20 委員会を開催した。千葉大会への取り組みなどを検討。詳細はニュース誌3月号に掲載。3/27評議員会の前に開催する予定

#### 5. その他—1

##### 【以下、評議員会の下の委員会】

- 各賞選考委員会 (委員長 新井田清信)
- ・2004年度日本地質学会各賞候補者募集 (News誌, Vol6, No.12) を行っている。
- ・表彰種目は、日本地質学会賞・日本地質学会論文賞・日本地質学会研究奨励賞・地質学会小藤賞・日本地質学会功労賞・日本地質学会表彰・日本地質学会国際の7つの賞。
- ・応募の締切は、2004年3月31日 (必着)。
- ・4月に、各賞選考委員会で、応募のあった候補者の選考を行う予定である。

#### 名誉会員推薦委員会 (委員長:加藤副会長)

- ・名誉会員の候補者募集 (支部, 専門部会) 公募するために準備をすすめる。

#### 科研費委員会 (委員長:竹内)

- ・平成17年度科研費審査委員推薦については、科研費委員会が候補者選出し、評議員会の通信投票により推薦者を決定し、各研連に推薦した。

#### 学術会議連絡委員会 (委員長:井内)

- ・地質学研連報告  
議事録案に基づいて、国際惑星地球年への取り組み、地質学の教育改革への取り組み、科研費審査委員選考などの報告があった。

#### 法務委員会 (委員長:上砂)

- ・2月23日, 3月9日, 第2回, 3回委員会を開催。

- 1) 倫理規定に関わる会則・細則の修正案



原案通りで、評議員会に諮る。

2) JSTからの著者抄録の利用承諾に対するコメント

翻訳権を許諾する。置き換え等の同一性保護権侵害は権利主張しない。この理事会判断のもとに、答申された問い合わせを至急行い、最終回答することとした。

3) 講演のリジェクト

4) 講演要旨および見学旅行案内書の著者権譲渡

項目6)「見学旅行案内書」は、昨年から同意書をとっているの、本文から削除する。会則の「学会出版物の記述への追加」という変更はしばらく待った方が良い。

倫理規定策定委員会（委員長-松本 良，担当-伊藤）

- ・ 法務委員会報告参照

選挙管理委員会（委員長-手塚裕樹 担当理事-天野）

- ・ 立候補者の受付を2月末で終了。来週はじめまでには届くよう投票用紙の発送準備中。

○ 議 題

1. 2003年度決算案及び2004年度予算案について

- ・ 会費収入の減少について、会員を増やす方策を考えねばならない。賛助会員を増やすためには、それら会員に学会から何を還元するか、方策を考える必要がある。幅広い会員から法人化の基本財産となる募金を集めることが大事であるので、募金活動をこれまで以上におこなう必要がある。
- ・ 法人化に関し、事業計画とともに今後4年間の予算案（追加資料）を示す必要がある。会計委員会としては2007年までのおおよその案は作成したが、これについて

では事業計画が大きく関係する。

2. 法人化をにらんだ事業計画について（平会長）

法人化にむけて、今後3年間の事業目標を文部科学省に提出する必要がある。

事業項目を具体的に挙げていく必要がある。

- ・ 地方地質誌は刊行計画が進んでおり、すべての出版完了までには3、4年かかる。他に出版計画を具体化する必要がある。
- ・ JABEEなどの技術者認定制度に参画している。
- ・ 国際的な学術活動などは、だれがどのように具体的に提案できるか明確にする必要あり。
- ・ 博物館のサポート会員
- ・ 災害についても事業計画を具体化する必要あり。
- ・ 一般国民向けのリーフレットなどを作成していく
- ・ 用語集、フィールド・ジオロジーなどをノミネートする。
- ・ ジオツアーや国立公園地質案内を考える。
- ・ 会長提案の事業目標の各テーマ毎に、今後3年間の事業内容と予算計画をプランする担当を決めた。3月24日までに準備して事務局で集約することとした。本件に関しては議論を継続する。
  1. 地質学の最先端分野や学際分野の開拓を研究発表会や講演会を通じて行う（木村・天野）。
  2. 関連学術団体等と協力して学術の推進や技術者認定制度の普及に努める。（加藤）
  3. 会員の研究成果について論文発行を行うとともに、日本の地質についての最新の知見をまとめる。（三宅）
  4. 国際的な学術活動やわが国の主導・

参加する国際共同研究計画を支援する。（脇田、アジアに焦点をあわせて）

5. 学校・博物館・市民講座・インターネット等を通じて、地質学の教育・普及に努める（公文・宮下・中井）

6. 災害に関する基礎調査手法の標準化・マニュアル化を行い災害に強い社会の構築に貢献する。（玉生）

- ・ 事務所拡張の件について、井桁ビルの空き室について、家主から学会に話が合った。家主は地質学会に借りてもらえれば、ありがたいと言っている。以下のような議論があったが、宮下理事を中心に、借用の是非について意見集約を行う。今すぐというのではなく、必要な時がきたら借りたらどうか？／減額して300万円としても、現在の財政状態ではその出費は厳しい。／現在は1フロアで500万円程度であるが、2フロアで、いくらで借りられるかが問題。／現在のスペースの有効利用を考えたらどうか（電動書庫の導入）。／多くの学会で共同して借りるということはどうか？

3. 国際地球惑星年計画について（脇田理事からの申し送り）

- ・ 佐藤IUGS副会長によると日本での行事等について検討中、具体的になった段階で学会にも協力依頼をするとのことであった。国際地球年計画に賛同するか議論してほしい。
- ・ 小松学術会議会員からも学会として対応していただけるよう、井内評議員を通じて依頼がきている。アンケート調査依頼が届く予定なので、それを受けて協力していく。

4. 評議員会の議題追加等について

なし。

日本地質学会会員の皆様へ 割引予約販売のお知らせ

## フィールドジオロジー (全9巻)

編集：日本地質学会フィールドジオロジー刊行委員会

秋山雅彦 (委員長)・天野一男・高橋正樹 (編集幹事)

B6判・約200頁・定価2,100円 ⇒ 会員特別割引価格1,900円 (税込)



刊行に先立ち日本地質学会会員を対象に、割引価格での予約販売をいたします。

手続きは、共立出版に直接扱っていただきますので予約申し込みは、下記用紙をご利用ください。

日本地質学会フィールドジオロジー刊行委員会

事務手続き代行：共立出版株式会社

[問い合わせ先] 〒112-8700 東京都文京区小日向4-6-19

共立出版株式会社 営業部 販売課 担当：藤本・矢島・櫻井 TEL 03-3947-2513

[お支払方法] 書籍 (請求書・振替用紙同封) 到着後、ご送金ください。

\*お申込みはこのページをコピーのうえ、FAXまたは郵便にて共立出版へお送りください。

\*この申込み用紙は書店・生協ではご利用 (注文) できませんのでご注意ください。

**申込み書** ⇒ 共立出版株式会社 営業部販売課 行 FAX 03-3947-2539

\*日本地質学会会員に限り会員特別割引価格 各巻1,900円 (税込・送料込み)

\*全巻セット・続刊のご注文は、刊行次第お送りいたします。

巻数	書名	著者	注文
	フィールドジオロジー 全9巻	日本地質学会フィールドジオロジー刊行委員会	セット
1	フィールドジオロジー入門	天野一男・秋山雅彦	5月刊 冊
2	層序と年代	長谷川四郎・中島 隆・岡田 誠	続刊 冊
3	堆積物と堆積岩	保柳康一・公文富士夫・松田博貴	5月刊 冊
4	シーケンス層序と水中火山岩類	保柳康一・山岸宏光	続刊 冊
5	付加体地質学	小川勇二郎・久田健一郎	続刊 冊
6	構造地質学	天野一男・狩野謙一	続刊 冊
7	変成・変形作用	中島 隆・高木秀雄・石井和彦・竹下 徹	5月刊 冊
8	火成作用	高橋正樹・石渡 明	続刊 冊
9	第四紀	遠藤邦彦・小林哲夫	続刊 冊

ご芳名			
ご送付先	〒 _____		
<input type="checkbox"/> 勤務先			
<input type="checkbox"/> ご自宅			
TEL		FAX	
E-mail			
通信欄	<input type="checkbox"/> 公費等の場合は、請求先・必要書類をご記入ください。		

# マイルト<sup>®</sup>の ラボ・ファクトリープラン 3点セット

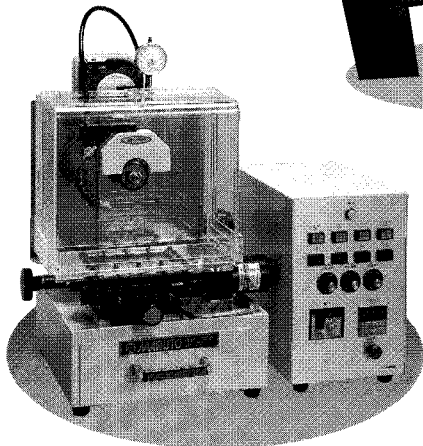
分析・検査用試料作製機器  
〈切断・研削・研磨〉

なりの  
小さな機械だが  
役に立つ

小型 精密 操作簡単 低価格

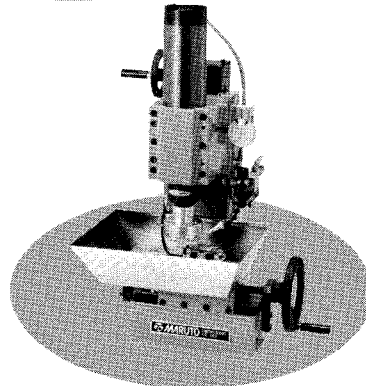
3機種揃えば、各種試料の精密加工が可能です。

(ガラス・水晶・シリコン・セラミックス  
・鉱物・金属材料などの加工)



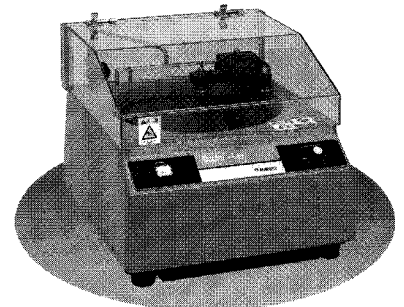
## カッティング 連続・浅切込みができる ステップカッター 〔MC-170Y〕

- 試料へのダメージが少ない
- 最小切込み量 10μm/pass
- 最大加工能力 H25×L40mm
- 設置面積 W550×L450mm
- 本体価格 185万円～



## グライデング 立軸平面研削機 プレラップ 〔MG-300〕

- 最小切込量は、0.01mm目盛
- 加工サイズは、MAXφ50mm
- 任意研削面の逐次観察が可能
- 研削・研磨、同一治具使用により、研削・研磨工程は簡単で高精度
- 設置面積 W560×L380×H640mm
- 本体価格 98万円～



## ポリッシング 精密鏡面研磨機 ドクターラップ 〔ML-180〕

- 組織検査用試料のラッピング・ポリッシング
- アクセサリ豊富
- 研磨試料サイズ φ1～φ100mm
- 設置面積 W400×L400mm
- 本体価格 45万円～

☆貴重な試料を無駄なく手軽に加工したい、各種カタログあります。開放実験室でテスト加工が可能です。

材料を **切る**・**削る**・**磨く** そして **測る** 技術で奉仕する

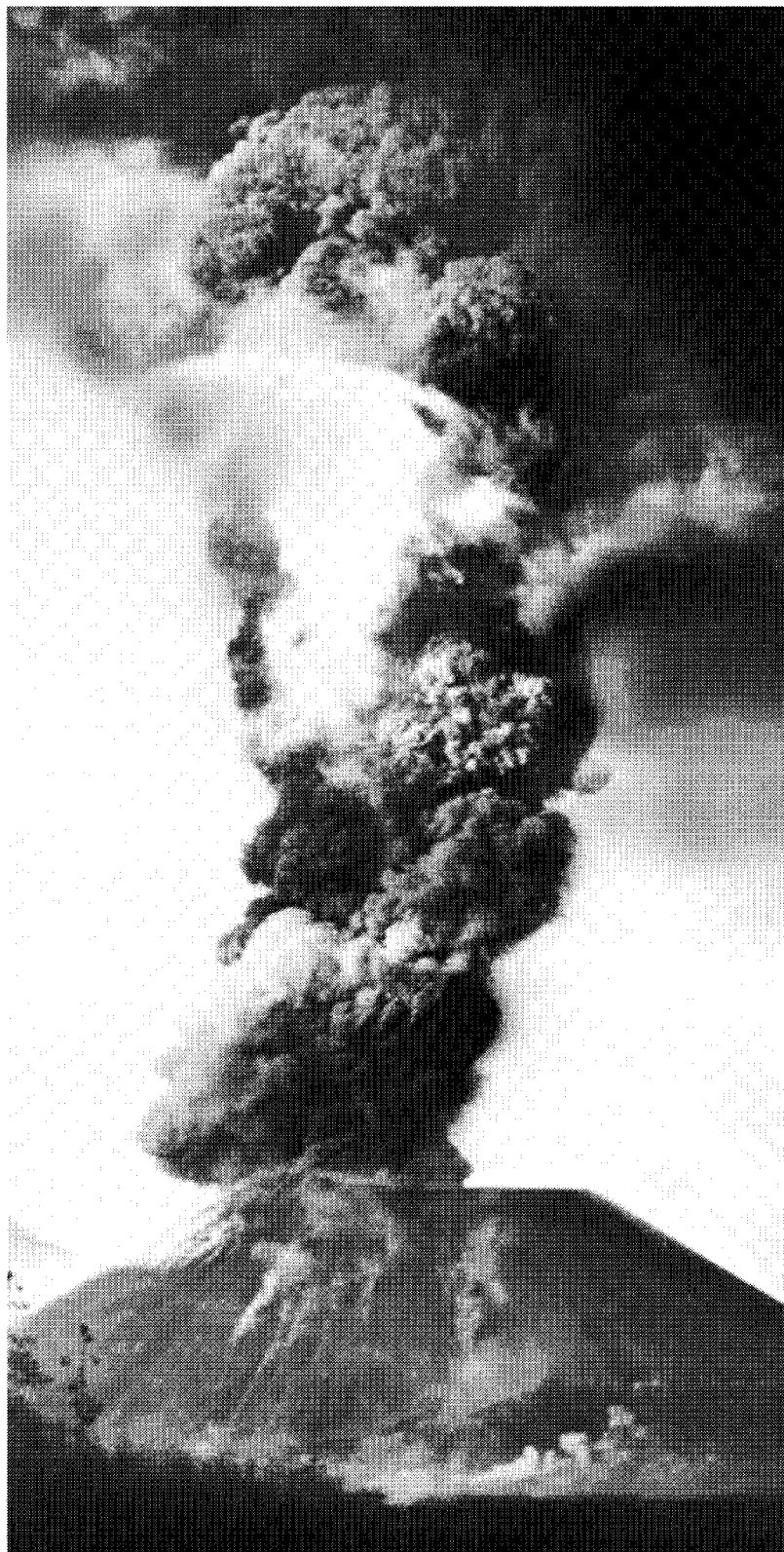


本 社 / 〒113-0034 東京都文京区湯島 1-1-10  
☎東京 (03) 3251-0727 (代表) FAX: 東京 (03) 3251-2478  
福岡連絡事務所 / 〒815-0033 福岡市南区大橋 1-21-5 岩田ビル  
☎福岡 (092) 512-2755 FAX: 福岡 (092) 561-4288

E-mail: maruto@maruto.com http://www.maruto.com



# READING THE ISOTOPIC CLOCKS



## 地質年代の測定

御社の調査・研究に必要とされる信頼出来るデータおよび特別なご注文については、経験と実績の豊富な当社へおまかせ下さい。

- K/Ar 年代測定
- Rb/Sr 年代測定
- $^{14}\text{C}$  年代測定
- 堆積速度の査定  
( $^{210}\text{Pb}$ ,  $^{137}\text{Cs}$ ,  $^7\text{Be}$ )

堆積速度の査定についての詳細は下記のURLをご参照下さい。

<http://www.iadc-dredging.com/terra-et-aqua/2000/78-4.htm>

- Boron11/10同位体測定

---

## ジオスペース・サイエンス株式会社

---

〒170-0013  
東京都豊島区東池袋1-20-2  
池袋ホワイトハウスビル 620号  
TEL03-5950-3661 FAX03-5950-3662  
E-mail:sales@geospace.co.jp  
<http://www.geospace.co.jp/>